

令和7年度「やまぐちっ子の心を育む道徳教育」プロジェクト推進校
研究サポート委員 実践事例集

| NO. | 学校 | 内容項目 | 学年 |
|-----|-------------|---------------------|---------|
| 1 | 岩国市立岩国小学校 | 公正、公平、社会正義 | 小学校5年 |
| 2 | 岩国市立平田小学校 | 公正、公平、社会正義 | 小学校4年 |
| 3 | 岩国市立麻里布中学校 | よりよく生きる喜び | 中学校1年 |
| 4 | 柳井市立柳井小学校 | 礼儀 | 小学校5年 |
| 5 | 柳井市立小田小学校 | 規則の尊重 | 小学校2年 |
| 6 | 柳井市立大島中学校 | 友情、信頼 | 中学校3年 |
| 7 | 周南市立秋月小学校 | 勤労、公共の精神 | 小学校4年 |
| 8 | 周南市立周陽中学校 | 公正、公平、社会正義 | 中学校3年 |
| 9 | 山口市立秋穂中学校 | 友情、信頼 | 中学校1年 |
| 10 | 山口市立大海小学校 | 希望と勇気、 努力と強い意志 | 小学校2年 |
| 11 | 宇部市立厚東小学校 | 規則の尊重 | 小学校2年 |
| 12 | 宇部市立二俣瀬小学校 | 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度 | 小学校5・6年 |
| 13 | 宇部市立小野小学校 | 親切、思いやり | 小学校1・2年 |
| 14 | 下関市立一の宮小学校 | 礼儀 | 小学校3年 |
| 15 | 下関市立勝山中学校 | 公正、公平、社会正義 | 中学校2年 |
| 16 | 萩市立多磨小学校 | 親切、思いやり | 小学校5・6年 |
| 17 | 萩市立須佐中学校 | 感動、畏敬の念 | 中学校2年 |
| 18 | 岩国市立岩国中学校 | 礼儀 | 中学校1年 |
| 19 | 岩国市立東小学校 | 生命の尊さ | 小学校5年 |
| 20 | 柳井市立柳井西中学校 | 生命の尊さ | 中学校1年 |
| 21 | 田布施町立田布施中学校 | よりよく生きる喜び | 中学校1年 |
| 22 | 平生町立平生小学校 | 節度、節制 | 小学校3年 |
| 23 | 周南市立鹿野小学校 | 正直、誠実 | 小学校6年 |
| 24 | 周南市立須々万中学校 | 遵法精神、公德心 | 中学校3年 |
| 25 | 防府市立新田小学校 | 規則の尊重 | 小学校4年 |
| 26 | 防府市立向島小学校 | 友情、信頼 | 小学校1年 |
| 27 | 防府市立中関小学校 | 規則の尊重 | 小学校4年 |
| 28 | 美祢市立大嶺小学校 | 正直、誠実 | 小学校2年 |
| 29 | 美祢市立伊佐中学校 | 希望と勇気、 克己と強い意志 | 中学校1年 |
| 30 | 下関市立垢田小学校 | 善悪の判断、自律、自由と責任 | 小学校5年 |
| 31 | 下関市立川中西小学校 | 節度、節制 | 小学校2年 |
| 32 | 阿武町立福賀小学校 | 親切、思いやり | 小学校1・2年 |
| 33 | 阿武町立阿武中学校 | よりよく生きる喜び | 中学校1年 |

～公正、公平、社会正義～

岩国市立岩国小学校

1 本授業におけるポイント

- 4つの場面の中で、特に意見が分かれた場面を取り上げて、グループを変えながら話し合うこと（ジグソー学習）を通して、道徳的価値（公平か？不公平か？）を多面的・多角的に捉えることができるようにした。また、ファシリテーションの技法を活用することで、話し合いの活性化を促すようにした。
- 本校の研究テーマは、「協働的な学びの充実を図る授業作りを通してコミュニケーション力を育む」としている。児童の実態から、「他者意識」や「他者理解」を育む必要性を感じている。本授業では、公平な世の中を実現するために大切なことを考える中で、相手の考えを理解することや、コミュニケーションを図り、お互いに納得を図ることの大切さに気付くことができるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 公平と不公平 「これって不公平？」（日本文教出版）

2 ねらい

具体的な事例の善悪の判断の根拠について話し合うことを通して、公平な状態は、コミュニケーションを図り、相手理解や互いに納得して行動するものであることに気付き、公平な世の中の実現に努めるための道徳的判断力を高める。

3 学習指導過程

(1) 導入 公平な世の中について予想した上で、課題を把握する。

教師：【公平な世の中】とは、どんな世の中なのか、予想してみましょう。

児童A：実現したいと思っていることができる。

児童B：みんなが平等で、幸せ。

児童C：障がいをもっていても同じように生活できる。

○ 指導上の留意点・支援等

後で善悪を考える際の判断基準となるため、公平な世の中とは、どんな世の中なのか、予想を全体で共有する。その後、めあて【公平な世の中を実現するために、大切なことを考えよう。】を提示する。

(2) 展開 4つの事例が、よいか悪いか判断し、その根拠について話し合う。

教師：今から4つ例を出します。よい世の中という観点でいくと、○よいか？、×悪いか？を判断していきます。○か×かどちらかに手を挙げます。

① 女の子だからサッカーに入れてあげない。 ○か？ ×か？

② 車いすの男の子に、ゆるい簡単なボールしか投げない。 ○か？ ×か？

③ 給食の配膳で、全員同じ量ずつ分ける。 ○か？ ×か？

④ 紙芝居の絵を一人に任せて、二人は塾があるので帰る。 ○か？ ×か？

教師：①と④は、ほぼ全員、悪いという結果が出たけど、どんなところが悪いですか？

児童D：①は、女の子だけ入れないとか差別している。

児童E：④は、一人に押し付けるのは、明らかにおかしい。

児童F：④は、塾に行くのは、ただの言い訳。また明日みんなで作るべきだと思う。

教師：では、意見が分かれている、②について班で話し合います。まずは、個人で考え②が、よいと思う理由をピンクに、悪いと思う理由を青に書きましょう。

教師：次に、班で話し合います。（話し合いのルール、ゴール、進め方の説明をする。）

教師：班の意見を発表してください。

児童G：○の理由は、車いすの子が少しでもボールを取れるようにしているし、悲しい思いをしないようにしているから。×の理由は、いつもゆっくり投げたら上手くなれないから。

児童H：○の理由は、相手を気遣っているから。

×の理由は、障がいがあるからと、必ず優しく投げるというのは違うと思う。

③話し合いの進め方（1回目）

1. ふせんに考えを書く。【3分】
ピンク→○よい 青→×悪い
2. 司会と発表者を決める。
3. 1人ずつふせんをばりながら発表【2分】
挙手→司会「○○さん、どうぞ。」
4. 質問や意見を発表する。【1分】
「質問や意見はありませんか。」
5. 結論について話し合う。【2分】
「私は、～だと思えます。理由は、」

○ 指導上の留意点・支援等

話し合いに入る前に、事前に付箋に意見を書かせることで、聞くことに集中できるようにした。また、ルールや進め方、ゴールを事前に伝えた。さらに、班で2名は残り、2名は他の班に行き話し合うことで、多様な意見を引き出せるように心掛けた。【①多面的・多角的な見方】

教師：○はもちろんです、×の意見としても、相手のことは、きちんと考えていますね。どうすれば、よりよい状況に変えていくことができそうですか？

児童I：投げ方を相手に合わせてだんだん強くしていけばいい。

児童J：「強くしていい。」とか、言葉で伝えるべきだと思います。

○ 指導上の留意点・支援等

問題の解決方法を話し合う中で、一方的に相手の状況に合わせて行動するだけでなく、コミュニケーションを図り、相手の考えを理解して行動することの大切さについて気付くことができるようにした。

(3) 終末

教師：今日の学習を振り返ります。公平な世の中は、どのようにすれば実現できますか。

児童K：公平な世の中は、相手のことを思いやると実現できると思う。

児童L：相手を思いやることに加えて、実際に考えて行動することで実現できると思う。

○ 指導上の留意点・支援等

振り返りを書いた後に、ペアで交流し、言い終わったら拍手をして、お互いの考えを認め、尊重し合うことができるようにした。【②自分自身とのかかわり】

3 評価について【①多面的・多角的な見方、②自分自身とのかかわり】

① 例について、よいか、悪いか、多くの友達と意見を交流する中で、多様な見方があることを知り、公平について考えを広げていこうとしている。

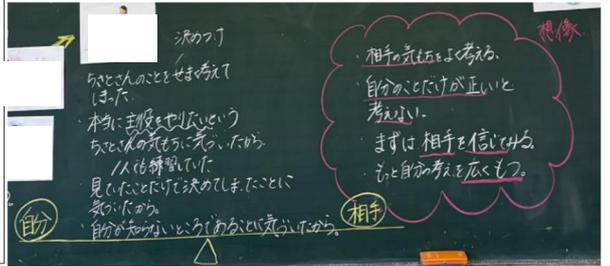
② 公平な世の中を実現するために大切にしていきたいことは何か、今回の学習を基に「自己の振り返り」をもち、他者と共有する中で、考えを深めようとしている。

4 実践を振り返って

班での話し合いの前に、進め方などを児童と共有し、時間を十分に確保したことで、他者と意見を積極的に交流する姿が見られ、公平さについて多様な考えをもつことができた。しかし、振り返りの時間が足りず、視点が抽象的になり、「相手のことを考える」、「思いやりが大切」までは出たが、具体性が少なかった。そこで、今後自分ならどうしたいか、具体的にイメージをさせてもよかった。

(3) 終末 決めつけないために必要な考えについて考える。

教師：だれに対しても、どんなときでも決めつけないために必要な考えは何でしょうか。
 児童A：相手の気持ちをよく想像する。
 児童B：自分の考えだけが正しいと思わないようにする。
 児童C：まずは、相手を信じてみる。
 児童D：もっと自分の考えを広くもつように意識する。



○ 指導上の留意点・支援等

- ・「もし、『わたし』が放課後1人で練習するちさとさんの姿を見ていなかったら、決めつけていたままだただらうか。」と問うことで、どんなときでも決めつけないために必要な考えについて、より深く考えられるようにする。
- ・意見を板書にまとめた後、決めつけてしまうときと決めつけないときの違いについて、「自分の考えだけを大切にする」と「相手の気持ちを想像する」という観点のシーソーで対比的な板書をし、違いについて視覚的にとらえやすくする。

3 評価について

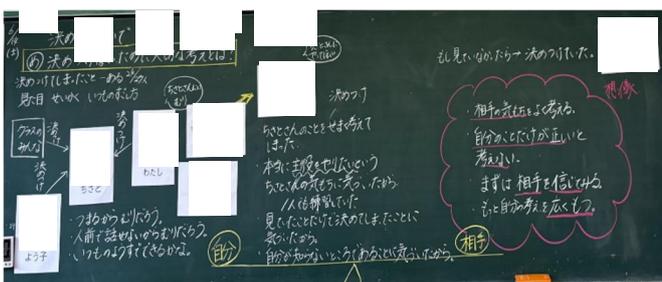
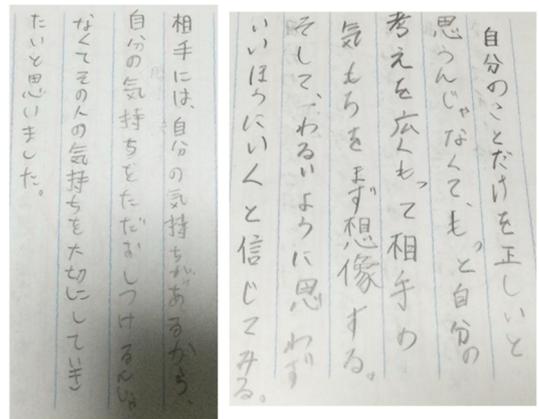
○ノートの振り返りを基に、学びをこれからの生活に生かそうとしている記述を評価する。

4 実践を振り返って

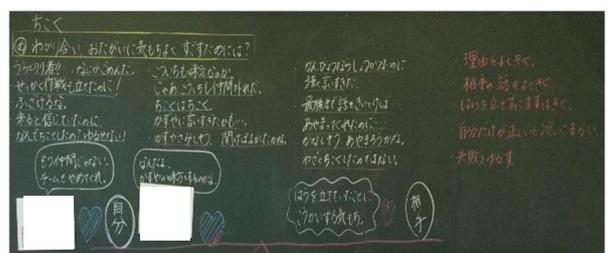
本実践を通しての成果は2つある。

1つ目は、道徳的価値を深めるための発問により、児童の考えが深まったということである。終末の際、だれに対しても決めつけないようにするための意見は出ていた。しかし、どんなときでもについての意見は出ていなかった。だから、「もし、～だったら?」と、多様な場合を挙げることで、児童たちの考えが深まった。2つ目は、「自分」と「相手」の対比的な板書が児童の内容の理解に効果的であるということである。このような板書は他の道徳教材でも活用していたため、終末でまとめる際に、「今回も自分と相手の違いだ。」と気づく児童が多かった。相手意識をもって行動することの大切さを回数を重ねることで学んでいると感じた。

課題は、決めつけてしまう要素として、周りの意見に流されるということを押さえていなかったことである。今回の題材では、登場人物のまわりの人も決めつけているので、登場人物はそれに流されて決めつけてしまったのかもしれないことを押さえると、より児童の考えが深まったと考えた。



他の教材の板書



1 本授業におけるポイント

- 教材の場面ごとに登場人物の心情を捉えながら、自分自身に重ね合わせて考えることができるように、生徒の思考に沿った発問を設定する。
- ネームカードを使い、それぞれの生徒の立場を明確して意見交換することで、生徒一人一人が自分の意見を持ち、自由に意見を出し合いやすい雰囲気をつくる。

2 授業の実際

1 主題・教材名 よりよく生きる 「いつわりのバイオリン」(日本文教出版)

2 ねらい

弟子の作品を自分の作品であると偽ったフランクのその後の心情について考える活動を通して、自己の弱さを乗り越えて、人間としてよりよく生きようとする心情を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 自分自身の経験を振り返る。

| |
|--|
| <p>教師：悪いことだとはわかっているけど、ついしてしまった経験がありますか。 ある人は手を挙げてください。</p> <p>生徒：(ほとんどの生徒が手を挙げる)</p> <p>教師：どんな経験がありますか。</p> <p>生徒A：ゲームを夜遅くまでしてしまったこと。</p> <p>生徒B：宿題をやるのを忘れていて、間に合わせるために、答えをすべて写してしまったこと。</p> <p>生徒C：テストが返ってきているのに、まだ返ってきていないと、親に嘘をついたこと。</p> |
|--|

○ 指導上の留意点・支援等

自分自身の経験を振り返り、共有することによって、誰もが弱さをもっていることに気付いたり、他の人の経験に共感したりすることで、フランクの行動を自分事として考えることができるようにする。

(2) 展開 教材「いつわりのバイオリン」を読み、自分の弟子であるロビンの作品を自分の作品であると偽ったフランクの心情について考える。

| |
|--|
| <p>教師：フランクがロビンのバイオリンのラベルを自分のものに貼り替えたことについて、どう考えますか。</p> <p>生徒D：自分のバイオリンをそのまま渡せば、自分を信頼して依頼してくれたバイオリニストを裏切ることになるから仕方なかった。</p> <p>生徒E：どうにもできずに追い詰められていたのは分かるが、それでも人のものを自分のものだと偽るのはよくない。弟子の作ったものを自分が作ったと偽るのは、師匠としてのプライドがないと思う。</p> <p>生徒F：ロビンに対して申し訳ない気持ちがあったが、自分を守る行動をとってしまったのだと思う。</p> <p>教師：演奏会は成功したにもかかわらず、フランクの心は重く沈み、日に日に元気をなくしていったのはなぜだろうか。</p> <p>生徒F：ロビンに対しての強い罪悪感があった。</p> <p>生徒G：自分のバイオリンで成功したわけではないから、全くうれしくなかった。</p> <p>生徒H：正直に言わないといけないと思いながらも、言い出せない自分を責めていた。</p> |
|--|

○ 指導上の留意点・支援等

フランクの行動につながる心情の変化を捉えた上で、ネームカードを活用して、①フランクの気持ちに共感できるか、②フランクのしたことは仕方なかったのか、の2つの軸で立場を明確して意見交換をさせることで、様々な意見に触れさせ、自分の考えを深められるようにする。

(3) 終末 よりよく生きるために大切にしたいことについて考える。

教師：ロビンからの手紙を読んだフランクはどんな思いで涙を流したのだろうか。
生徒I：自分がしてしまったことに対して深く後悔している。
生徒J：なぜ、ロビンはこんな自分を許してくれるのかと疑問に思う気持ち。
生徒K：素直に言い出すことができなかったことに対して、申し訳ないと思う気持ち。
生徒L：今からでも自分のしてしまったことをロビンに正直に話して謝罪し、自分の人生をやり直したいと思っている。
教師：失敗や過ちはあるけれど、よりよく生きるために大切なことは何だろうか。
生徒K：失敗は誰にでもあるけれど、その失敗を認めて自分に正直でいることが大切だと思う。
生徒M：自分に誇りをもてる生き方をすること。
生徒N：失敗したことをそのままにするのではなく、失敗を生かして成長すること

○ 指導上の留意点・支援等

ロビンの手紙を読み、涙を流したフランクの気持ちを、弱い自分を乗り越えようとするフランクの姿に着目して考えることを通して、よりよく生きるために大切なことを自分に重ね合わせて考えさせるようにする。

3 評価について

- 誰もがもつ人間の弱さや醜さに共感しながら、その自分の弱さを乗り越えようとする強さや気高さをもって、よりよく生きていこうとすることについて考えているか、授業中の発言やノートの記述から見取る。
- 様々な意見交換を通して、「よりよく生きること」について自分の考えを深めていたか、振り返りの記述から見取る。

4 実践を振り返って

フランクが追い込まれた状況の中で弟子の作品を自分の作品だと偽ったことに対して、自分が同じ状況でもそうしてしまうかもしれないと共感する生徒が多かった。その中で、作品を偽ったことがフランクの保身のためなのか、そうではないのかという点で議論になり、フランクの心情を深く考えることができた。また、フランクが本当のことを言えなかった罪悪感と後悔で苦しむことになったことやロビンからの手紙をきっかけに立ち直ろうとするフランクの心情を自分自身に重ね合わせて考えることで、自分の弱さを認め、乗り越えようとする強さをもつことが大切だと感じた生徒が多かった。

課題は心情を捉えるための発問が多く、終末で時間を十分にとることができなかったことである。発問を精選し、時間をかけるべき部分を明確にして授業づくりを行っていききたい。

～礼儀～

柳井市立柳井小学校

1 本授業におけるポイント

- 自分事として考えられるように発問を工夫すること。
- 児童が自己を見つめ、振り返りをする時間を設定すること。

2 授業の実際

1 主題・教材名 挨拶をすると 「オーストラリアで学んだこと」 (東京書籍)

2 ねらい

相手の立場や気持ちを考えて、礼儀正しく心のこもった接し方をしようとする態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 これまでの自分の挨拶を振り返る。

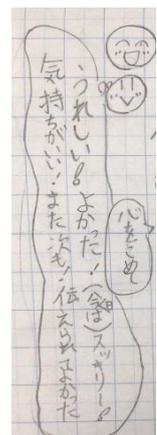
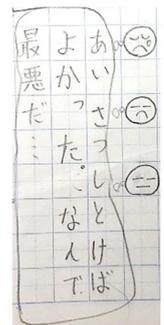
教師：これまでの自分の挨拶は100点満点中何点くらいでしたか。
その点数にした理由はなんだろう。
児童A：下校のとき、近所の人や知らない人にはあまりできていないと思うけど、学校の先生や友達には、できているから99点かな。
児童B：自分に元気がなかったり他のことに夢中になっていたりして、できなかったことがあるな。
児童C：顔を見たことのない人にはできないな。

○ 指導上の留意点・支援等

礼儀作法についてのよさや意義について、知識としては理解できていても、自分から心を込めて挨拶をする難しさがあることを共通理解し、自分のこれまでの行動を素直に振り返ることができるようにした。

(2) 展開 教材を読んで考える。

教師：「わたし」がそのまま通りすぎてしまったのは、なぜだろう。
児童A：びっくりして、何も言えなかった。
児童B：知らない人だったから、緊張して言えなかったのかな。
教師：そのときの「わたし」はどんな顔で、どんなことを考えていただろう。
児童A：泣きそうな顔で、「挨拶しておけばよかった・・・。」と後悔していると思う。
児童B：知らない人だったから驚いてできなかったと思う。次は、挨拶をしたいと思っているだろうな。
教師：また出会ったときに挨拶ができたとき、どんな顔でどんな気持ちだったでしょう。
児童A：にこにこした顔で、「自分から挨拶できた！よかった！」って安心した気持ちだと思った。
児童B：すっきりした顔だと思う。「また笑顔で挨拶してくれた！気持ちよくてすっきり。」って思っている。
教師：どうして「わたし」は、オーストラリアで学んだことを実行しようと思ったのだろう。
児童A：気持ちのよいことを日本でも共有したいという思いがある。みんなにもこの気持ちよさを知ってほしいという思い。
児童B：挨拶の大切さを改めて感じたから、日本でも伝えていきたいと思った。



○ 指導上の留意点・支援等

「挨拶を返せなかったとき」と「自分から挨拶ができたとき」のそれぞれの表情を、児童が絵で表した。表情を絵に表す活動を通して、そのときの気持ちを想像しやすくするとともに、挨拶の有無による表情や気持ちの変化に気付くことができるようにした。

(3) 終末 学習を振り返り、これからの自分について考える。

教師：学習を通して、これまでの自分を振り返り、考えたことについて書きましょう。
児童A：今まで下校のときに、おばあちゃんから「おかえり。」って言ってもらったのに、なんて返事をすればいいか分からなくて無視をしてしまったことがあった。今日の授業を通して、次「おかえり。」と言われたら、元気よく心をこめて「ただいま。」と言いたいと思った。
児童B：心のこもった挨拶は、やっぱり気持ちがいい。でも、相手がなにかしていたときに挨拶してもいいかなと悩むときがあった。そのときは、よく考えて、声の大きさとかに気を付けて挨拶をしていきたい。
児童C：挨拶をすると自分の気持ちもよくなるし、相手も気持ちがよくなる。これからは、挨拶だけでなく、「心のこもった明るい挨拶」をしようと思った。

○ 指導上の留意点・支援等

挨拶をすることで、相手だけでなく自分自身もよい気持ちになることを学級全体で共有した。また、導入で振り返ったこれまでの自分の姿を踏まえ、さらに改善するためには、これからの生活の中でどのようなことを意識していけばよいのかについて、具体的な行動や思いを考えることができるようにした。

3 評価について

相手の立場や気持ちを考えて礼儀正しく心のこもった接し方をしようとすることや、これからの生活でどのようなことを大切にしていきたいかということについて考えているか児童の発言やノートの記述から評価を行う。

4 実践を振り返って

礼儀作法について、そのよさや意義は理解しているものの、実生活では自分から心のこもった挨拶をすることが難しい児童がいることが分かった。また、先生や友達には挨拶ができて、地域の人に対しては難しさを感じている児童も多かった。そのため、これまでの自分の行動を振り返る時間を十分に確保することが大切であると感じた。

教材文を聞き終えた後、ある児童が「『おかえり。』と言われたときに、何と返せばよいのか分からず、そのまま通り過ぎてしまったことがある。」と実体験を話してくれた。他の児童からも同様の経験が挙がり、多くの児童が自分事として考える姿が見られた。教材文を通して、自分の生活と結び付けながら、より深く考えることができたように感じる。

児童の発言をきっかけに、学級全体が礼儀や挨拶について自分自身の問題として捉えることができた。今後も、感じたことや思ったことを安心して交流できる時間を大切にしていきたい。

1 本授業におけるポイント

- 導入では、公共物や場所、その使い方について想起させ、ねらいとする道徳的価値への方向付けを図り、「みんなのものを使う時、どんな心が大切だろう」という問題意識を高める。
- ねらいとする価値へ迫るために、まず、周りに迷惑をかけていることにも気付かないほど、紙飛行機を飛ばすことに夢中で遊んでいる二人の気持ちにしっかりと共感させる。その後、自分勝手な行動で他者に迷惑をかけてしまった二人の心情を考えさせることで、公共物や場所を大切に使うと自分も相手も気持ちよく安全に生活することができるということに気付かせたい。
- ワークシートに意見を書き終えた児童同士で意見交換をし、友達の見解の中で納得した考えや疑問をもった考え等について赤青鉛筆で印を付ける。

2 授業の実際

1 主題・教材名 みんながつかうみんなのもの「きいろいベンチ」（東京書籍）

2 ねらい

主人公の心情を考える活動を通して、ルールやきまりを守ると相手も自分も気持ちよく安心して過ごせることに気づき、みんなで使う物を進んで大切にしようとする態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 公共物や場所、その使い方について想起し、使い方を振り返る。

教師：みんなのものを使う時、どんなことに気を付けていますか。
 児童A：トイレのスリッパをそろえている。
 児童B：教室のトランプを使う時、やぶれないように気を付けている。
 教師：どうして気を付けて使っているのですか。
 児童A：学校でみんなで使うものだから。
 児童B：先生に怒られるから。
 児童C：壊れたらみんなが使えなくなってしまうから。

○ 指導上の留意点・支援等

個人が使う物からみんなが使う物へと順に提示するとともに、アンケートを基に自分自身の生活を振り返らせることで、ねらいに向けて意識することができるようにする。

(2) 展開 きいろいベンチを読み、話し合う。

教師：ベンチに乗って何度も何度も飛行機を飛ばしている二人はどんな気持ちだったのでしょうか。
 児童A：楽しいなあ。
 児童B：すごい飛ぶなあ。
 児童C：このベンチいいじゃん。
 教師：二人は女の子とおばあさんを見て、はっとしたとあるけど、はっとするってどういうことでしょうか。
 児童A：やばい、どうしようという感じ。
 児童B：まずいことに気が付いた感じ。

教師：この時二人はどんな気持ちだったのでしょうか。
 児童A：みんなで使う物なのに、ベンチにのぼったのがいけなかった。
 児童B：ベンチをふかないと。どうやってきれいにしよう。
 児童C：他の人に泥がついてしまった。謝った方がいいかな。

○ 指導上の留意点・支援等

- ・「はっとした」という言葉の意味を押さえ、次の発問へとつなげる。
- ・自分勝手な行動が、女の子やおばあさんに迷惑をかけてしまったことに気付いた二人の気持ちを押さえながら話し合う。
- ・補助発問として、「男の子がきまりを守っていたら、女の子やおばあさん、二人の男の子はどんな表情になっていたか。」を問う。

(3) 終末 公共物や場所を使うときに大切なことは何かを考える。

教師：みんなの場所や物を使う時に、大切なことはどんなことでしょうか。
 児童A：汚したり壊したりしないように大切にすること。
 児童B：正しい使い方を考えること。
 児童C：次の人が気持ちよく使えるようにすること。
 児童D：使い方のきまりを守ること。

○ 指導上の留意点・支援等

導入で提示した教室や学校にある身近な公共物の写真を再度提示し、自分の生活場面を想起しながら考えられるようにする。



3 評価について

- 身の回りの公共物や場所を大切に使うことで、自分も相手も気持ちよく安心して過ごせることに気づき、それらを大切に使うことについて考えを深めているか。
 (ワークシート・発言)
 児童A：今日の勉強でみんなのものを大事に使おうと思った。みんなで使うトランプやウノで遊ぶ時、気を付けて遊びたい。(発言)
 児童B：図書室の本を読んだ後にいつも全部そろえて返している。これからはスリッパとかちがうものもそろえたい。(ワークシート)

4 実践を振り返って

事前にとったアンケートを活用することで、まず自分自身の生活を振り返り、そこから教材を通して自分事としてしっかりと考えることができていた。話し合い活動では、赤青鉛筆を使って意見交換をすることで、児童同士の話し合いが活性化していた。意見交換の中で友達の考えを聞いて、「なるほど。そうだね。」「確かにね。」等、自分以外の考えに対して共感している姿が見られた。

話し合いの中で、一部の児童が主人公たちの気持ちを心のバロメーターに表しながら発言をしていた。気持ちの変化を考える場面が多かったため、全員で心のバロメーターや心情曲線などを活用しながら話し合いをすると、視覚的に分かりやすく、もっと考えが深まったのではないかと感じた。

～友情、信頼～

柳井市立大島中学校

1 本授業におけるポイント

- 教科書範読の際、登場人物3人のせりふを生徒に演じてもらい、語らいの様子を視覚的にも感じてもらう。
- 自由に意見を出し合える雰囲気を作るために、個人で考え、グループで対話し、全体で発表する場を設ける。
- 導入と終末に「話す」と「語らう」の割合を直線上に印し、自身の変容を見える化する。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 はげまし高め合う関係を築くために
「語らい—私たちが出会う新しい私たち」（東京書籍）

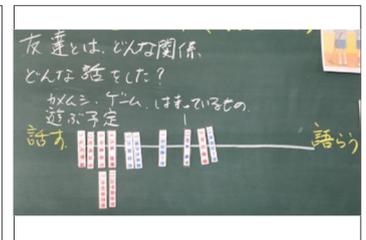
2 ねらい

受験について不安を感じ友達へ素直に自分の気持ちを語った陽菜の心情を通して、一人で不安を抱え込むのではなく友達と語らうことで、気持ちを分かち合い、励まし高め合いながら友情を深めていこうとする心情を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 友達と「語らい」をしているかを考える。

教師：あなたにとって友達とはどんな関係ですか。最近、どんな話をしましたか。
 生徒A：カメムシが増えて、教室に入ってくること。
 生徒B：ゲームについて。
 生徒C：今、はまっているものについて。
 生徒D：週末に遊ぶ予定について。
 生徒E：一緒にテニスをする。

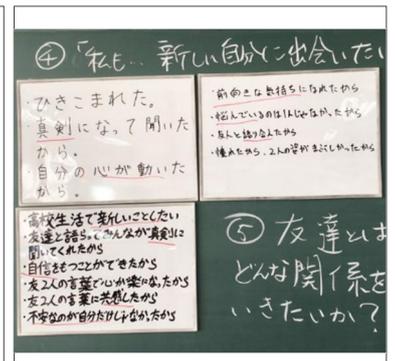


○ 指導上の留意点・支援等

普段、友達とどのように過ごしているかを話させて、「話す」と「語らう」（互いの気持ちや考えを話し合う）の違いをおさえておく。そして「友達と語らいをしていますか。」とたずね、自分の思う友達関係が「話す」と「語らう」がどのくらいの割合か、ワークシートの直線上に黒印を書かせた。

(2) 展開 「語らい—私たちが出会う新しい私たち」を読んで話し合う。

教師：陽菜が「私も・・・新しい自分に出会いたい。」と思えたのはどうしてだろう。
 生徒A：友達と語らってみんなが真剣に聞いてくれたから。友達2人の言葉で心が楽になったから。不安なのが自分だけじゃなかったから。高校生活で新しいことをしたいと、友達のおかげで自信をもつことができたから。
 生徒B：友達と語り合えたから自分も前向きな気持ちになれた。悩んでいるのは1人じゃなかった。憧れた2人の姿がまぶしかった。
 生徒C：友達の話をもっと真剣になって聞き、話に引き込まれた。自分の心が動いたから。

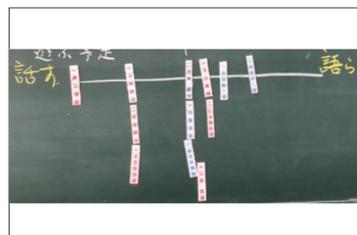


○ 指導上の留意点・支援等

個人→班→全体で話し合う。3人が心の内を確認し合いながら語らい、気持ちが前向きに変化していく陽菜を通して、「友情・信頼」にせまった。また、補助発問の「湊と悠真の言葉は、なぜ陽菜の心をぼかぼかにしたのだろう。」から、語らうことを通して受け取る温かい言葉が、自分をうれしい気持ちにさせることにも気付かせるようにした。

(3) 終末 励まし高め合う友達関係について考える。

教師：友達とどんな関係を築いていくとよいのだろう。
生徒A：楽しい話やふざけた話もするけど、本心も語らい合える関係。一緒にいると互いの気持ちが前向きになれる関係。
生徒B：話すだけでなく語らうことができる。気軽に相談できる、相談にのれる。
生徒C：違う考えがあるなら話せる、自分のことを語らい合える友達関係になりたい。



○ 指導上の留意点・支援等

「友達はやいものだ」で終わるのではなく、互いに信頼し、友情を深めていく友達関係まで考えさせたい。そこで、導入時での「語らい」の直線上にこれからの友達関係の位置に赤印を書かせた。

3 評価について

- 不安や苦しみを1人で抱え込まないで、友達と「語らう」ことで心が安らぐことに気づき、互いに励まし高め合う関係を築こうとする友達関係について考えを深めていたか。(発言、ワークシート)
- 導入と終末で「話す」と「語らう」の直線上に書いた印から、友達関係についての考えの変容を見取る。(ワークシート)

4 実践を振り返って

生徒の感想に、「これからの友達との関係を考えることができた。」「友達とどういう関係なのかを真剣に考えることができた。一緒に語らい合い、互いが影響を受けて成長する登場人物3人の様子が素敵だなと思った。」とあった。小さい頃から仲良しで優しい15名の温かいクラスである。しかし、相手を思いすぎたの遠慮から自分の意見が言えなかったり、友達の思いを聞かず1人で悩んでいたりすることもあった。そんな時、「友達に自分の思いを話してごらん、分かり合えるから。」と言いたい。この実践を通して、もっと本音で自分のこと、友達のことを考え、語り合える仲間になる一助となった。

教材の読み物の話に時間がかかったため、自分事として考える時間が充分にとれなかった。そのための代案として、3人の役割演技で読み終わった後、

- ① 3人は語らっていたね。「語らう」って、「話す」と何が違う？
- ② 最近「語らった」ことある？「語らい」たいことはある？
- ③ これからどんな友人関係をつくっていきたい？

と発問内容を変える授業展開にすることが考えられる。

～勤労、公共の精神～

周南市立秋月小学校

1 本授業におけるポイント

- 本時のめあてを児童一人ひとりが考え、意見を集約しながら設定することで、多様な感じ方や考え方から、道徳的価値の理解ができるようにした。
- 様々な立場の登場人物の心情を考え話し合うことで、教材から得た道徳的価値の理解を深められるようにした。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 はたらくよさ 「点字メニューにちょうせん」（東京書籍）
- 2 ねらい

相手の立場に立って考えることを通して、相手意識をもって働くことが人々の生活を支えていることに気付き、進んで社会に関わろうとする道徳的態度を育てる。

3 学習指導過程

- (1) 導入 実際の点字に触れたり観察したりしながら、身の回りにある点字や様々な立場の人のための工夫について想起する。

教師：どんなところで見たことがありますか。
 児童A：エレベーターのボタンで見たことがある。
 児童B：駅やトイレにもあったと思う。
 教師：どのような人のためのものか知っていますか。
 児童A：目が不自由な人のためのもの。
 児童B：自分たちでいう、文字の代わりになるものだと思う。ないと困るよね。

- 指導上の留意点・支援等

実際の点字（ボンドや調味料の容器）を用意し、点字など様々な立場の人への工夫に気付かせ、教材への興味や関心をもたせられるようにした。

- (2) 展開 教材文を読み、本時のめあてを考え、意見を出し合いながら決める。その後、登場人物の行動や心情について考える。

教師：教材を読んで、どのようなことから働くよさをみんなで考えたいですか。
 児童A：点字メニューを作っているときや出来上がった時の気持ち。
 児童B：のり子はなぜ、あきらめなかったのか。
 教師：みんなの意見をまとめると、どんなめあてになりますか。
 児童A：のり子の気持ちを考えたらよいという意見が多いな。
 児童B：のり子が点字メニューを作る前や後、作っている時の気持ちを考えたいという意見があるから、まとめるとよさそう。
 ⊕のり子の点字メニューを作っている時や完成した時の気持ちを考えよう。
 教師：のり子は、どんな思いで点字メニューを作ったのでしょうか。
 児童A：お客さまの喜ぶ顔がみたいな。
 児童B：家の仕事を手伝いたいという気持ちもあったと思う。
 児童C：間違えず、失敗のないように作りたい。
 教師：点字メニューが完成した時はどんな気持ちだったでしょう。
 児童A：これで目の不自由なお客さまの役にたてるぞ。』
 児童B：お店の手助けにもなったかな。

⊕のり子の点字メニューを作っている時や完成した時の気持ちを考えよう

みんなで考えたいこと
のり子はどんな気持ちで点字メニューを作っていたのか、
のり子はなぜあきらめたのか。

みんなで考えたいこと
のり子は、ほめられてどう思ったのか。
のり子は、どういう気持ちでやっていたのか。

(点字メニューを作る時、
のり子の気持ち)
点字メニューを作るの
はちょっとむずかしい
けど楽しいこれを
かんせいさせて目の
不自由な人たちに
ようこんでもうあげよう

(完成したときの気持ち)
やっほーって完成たぞ
お母さん、お父さん、目の不
じゆうな人の役に立てたか
もー

○ 指導上の留意点・支援等

主題に焦点をあてためあてを児童一人ひとりに考えさせ、集約することで、多面的・多角的な思考を促した。また、様々な立場の登場人物の心情を場面に分け、丁寧に扱うことで相手意識で働くことよさに気付かせるようにする。

(3) 終末 点字機で点字を打つ様子^{の動画}や、身の回りにあるユニバーサルデザインの例について知り、学校生活と結び付けて振り返りをする。

教師：これから高学年になり、委員会活動などでみんなのために働く時、どんなことを大切にしたいですか。
児童A：使う人の立場を考えて行動したい。
児童B：仕事は気持ちだけでなく、役に立つことが大事だと思った。

授業の感想()
のり子がやめたがたでいいなと思っ
た事は不自由な人とか何の病
気でしょうか出て来た人の
目がた多見てもううれいと思
てる事をさがしているのがす
ぎたなと思っただけで自分も
それをしてあげたいです

授業の感想()
わたしもよく人のために
おもうと思っただけはあまり
ないけれど知らない人も
年がうんにもみんなでも
うれしさを分けて渡して
くれる人になりたいです

授業の感想()
今日は点字メニューを作
っている気持ちを考えて自分
にがんばりがなくてもそう
じやトイレのスリッパとか
人のためにすることを
したいと思っただけ

授業の感想()
人のためにがんばる
ということをもっと
ふやしたくなりました。
お礼がうちはまだ
あからもういいです

○ 指導上の留意点・支援等

具体的な場面として委員会活動につなげることで、相手意識をもち、学校全体のために進んで行動しようとする意欲を価値付けた。振り返りでは、委員会活動など将来の勤労の場面を意識して記述させた。

3 評価について

- 様々な立場から登場人物の心情を考えることで、働くよさについて理解している。(発言・ワークシート)
- 相手意識をもって働きたいという考えをもち、今後の生活に生かそうとしている。(ワークシート)

4 実践を振り返って

本時では、実際の点字を具体物として用意することで児童の関心を高め、身の回りの様々な立場の人への工夫へと視野を広げることができた。教材を読んだ後に、本時のめあてを児童一人ひとりが考え、意見を集約しながら設定することで、主題に迫る多面的・多角的な思考がワークシートの記述から見られた。また、様々な立場の登場人物の心情を考え話し合うことで、相手意識をもって働きたいという考えをもつことができた。

一方で、勤労のよさや必要性について、さらに具体的な場面と結び付けて考えさせる工夫が今後の課題である。今後は、委員会活動や学校生活での役割と関連付けながら、児童が社会の一員として主体的に行動しようとする意識を高めていきたい。

1 本授業におけるポイント

- 差別をしてはいけないと分かっているにもかかわらず、差別をしてしまうのはなぜかを考えることにより、心の弱さに気づき、心の弱さに打ち勝つために何ができるか考えるようにする。
- 共有する際に、多様な考えを交流し、語り合えるように、キーワードをカードに書き、それを示しながら交流することで、相手の表情を見ながら共有できるようにする。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 差別や偏見のない社会
「ネルソン・マンデラ」(あかつき教育図書)

- 2 ねらい

ネルソン・マンデラがめざした理想の実現について考えることを通して、差別する人間の弱さと受け入れるものの強さに気づき、正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接して、差別や偏見のない社会の実現に努める道徳的実践意欲を培う。

- 3 学習指導課程

(1) 導入 本時の学びのテーマ「公正・公平」な人とはどんな人なのか考える。

教師：「公正・公平」な人と言えば、ヒーローが思いつくけれど、みんなが思うヒーローとは誰ですか。
 生徒A：アンパンマン
 生徒B：私の友達の〇〇さん

- 指導上の留意点・支援等

「公正・公平」というと難しく捉える生徒もいるので、アニメや漫画などから想像しやすい「ヒーロー」に言い換える。

(2) 展開 差別をしてはいけないと分かっているにもかかわらず、差別をしてしまうのはなぜかを考える。

教師：なぜ心の中でいけないと分かっているのに、差別をしてしまうのでしょうか。
 生徒B：もし止めたら、自分が次はターゲットになるかもしれないから。
 生徒C：自分がされるのが怖いから。
 教師：そうなのですね。心の中の恐怖や不安のほうが、してはいけないという気持ちより強くなってしまいますね。

- 指導上の留意点・支援等

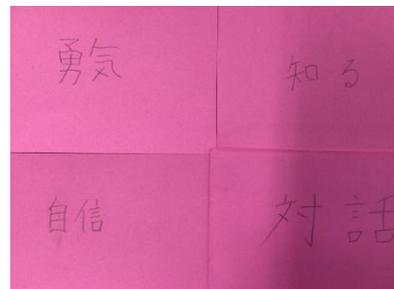
差別する側の人間の思いを考えることで、恐怖や不安に負けてしまう人間の弱さに気付くようにする。

(3) 終末 心の弱さに打ち勝つために、自分はどうするか考える。

教師：不安や恐怖などの心の弱さに打ち勝って、正義のヒーローになるために何が大切だと思いますか。
生徒A：ダメなことはダメという意思を貫く勇気が大切。
生徒B：一人で立ち向かえない時は、周りの人と一緒に向き合う。
生徒C：自分のことを見つめなおし、自分に自信をもつ。

○ 指導上の留意点・支援等

共有する際に、ワークシートではなく相手の表情を見ながら意見交換するために、自分が書いた作文からキーワードを一つ決め、カードに書き、そのカードを示しながら共有するようにする。



3 評価について

ワークシートの記述や授業中の活動の様子から、公正・公平な言動をするために自分が大切にしたいことを主体的に考え、他者と共有しながら深めていたかを評価する。

4 実践を振り返って

心の弱さにどのように打ち勝つかについて考えを深めることはできた。しかし、生徒自身の心の弱さが表れるのはどのような時か、その時の弱さとはどんな思いかなど「差別をしてはいけないと分かっているけど、差別をしてしまうのはなぜか」という問いについて深めることが難しかった。「自分だったら」という視点を持てるように発問を工夫し、考えたくなる発問づくりに努めたい。

～友情、信頼～

山口市立秋穂中学校

1 本授業におけるポイント

- スカイメニューのポジショニング機能を使い、生徒自身の思いを明確にするとともに、他者の意見も視覚的に見えるようにすることで、自由に意見を出し合える雰囲気づくりができるようにする。
- 導入と終末で同じ発問をし、価値観の変容を見られるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 友情・信頼「二人の通学路」（あかつき教育図書）

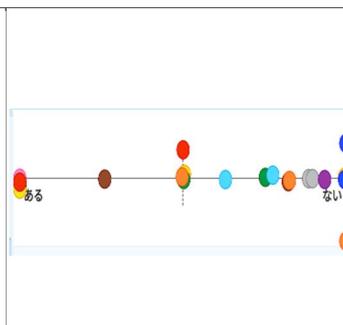
2 ねらい

幼馴染の健と藍子が、中学生になり周囲からの視線や自身の気持ちの変化に戸惑い、悩みながら成長していく姿を通して、同性間、異性間における友情関係の在り方について考え、豊かな友情関係を築いていこうとする道徳的心情を育む。

3 学習指導過程

(1) 導入 異性との友情と同性間の友情に違いがあるのか、スカイメニューのポジショニング機能で自分の考えを示す。

教師： 異性との友情と同性間の友情の違いはあると思いますか。あるかないか、自分が考えるところに○をつけてください。
 生徒A： 友達は友達。でもよくわからない。
 生徒B： ある。ちょっと異性と話すとき、少し気を遣う。距離を感じる。人によるかもしれないけど。
 生徒C： ない。本当に友達なら性別の違いもさほど気にならなくなると思う。
 生徒D： ないに近い。異性でも同性でも同じ友達という関係だから。だけど同性同士の行動を異性の人にするのはよくないこともあると思う。そこは考えて行動する必要があると思う。



○ 指導上の留意点・支援等

級友との普段の接し方から自分の友情に対する素直な感覚をポジショニングに示すように指示する。

(2) 展開 「健なら来てくれると思っていた。」 「来てくれるところが健らしくていいよね。」という藍子の言葉に健がどきりとしたのはどうしてかを考える。

教師： 「健なら来てくれると思っていた。」 「来てくれるところが健らしくていいよね。」という藍子の言葉に健がどきりとしたのはどうして？
 生徒A： 周りに変な噂をされて、2か月も藍子を避けていたのに、また藍子が健を信頼していたことがうれしかった。
 生徒B： 2か月、藍子を避けて後悔した。周りからどう言われようと藍子と仲良くしたい。
 生徒C： 藍子は俺の最高の幼馴染だな。異性だからって関係ない。友達は友達だから。
 生徒D： 急になんだよ。でもうれしい。

○ 指導上の留意点・支援等

2か月間避けられてきた健に対しても、信頼を寄せる藍子の言葉であることを押さえる。

(3) 終末 異性であっても同性であっても友達と関わる時に大切にしていこうとよいことは何かを考える。

教師：異性であっても同性であっても友達と関わる時に大切にしていこうとよいことは何だろう。
生徒A：ちょうどいい距離感でいること。異性、同性関係なく平等に接すること。
生徒B：男女仲良くできる環境が必要だと思った。(ひやかさないなど)
生徒C：(異性と接しているときに)もし付き合っていると勘違いされたときには、しっかりと本当のことを言ったらいいと思った。勘違いをされないように過ごしたらいい。
生徒D：互いに尊重しあうこと。

○ 指導上の留意点・支援等

異性間でも同性間でも根本的な部分は同じであることを押さえる。よりよい友情関係を築くために大切なことは何かという点でまとめていく。

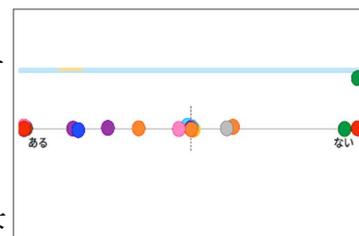
3 評価について

○ 評価方法

他者の感じ方や考え方を理解しながら、異性間の友情における悩みや葛藤、信頼に基づく友情を育むための課題についてさまざまな視点からとらえ考えているか、よりよい友情関係を築くために、異性間の友情について感じる難しさも理解しながら自分の考えを深められているかを授業中の発言やワークシートから見取る。

4 実践を振り返って

スカイメニューのポジショニング機能を使うことによって生徒の考えが目で見てすぐ分かったのがよかった。ポジショニング機能には、生徒が「ある」「ない」の自分のポジションを決めるまでの軌跡も明確にわかるので、「ポジションを決めるまでになぜこんなにも悩んだのか」とたずねやすくなり、生徒の葛藤した様子がよく分かった。



右上の図は、終末でも、再度、「異性との友情と同性間の友情に違いがあるのか」をたずねた結果である。変化の軌跡を見ると、以下のように、「ある」「ない」を行ったり来たりして、最終的には「ある」にポジションを決めた生徒が多かった。物語の内容により、異性で一緒にいると、恋愛関係と勘違いされてしまうことや距離感のとらえ方に、より意識が向いてしまったようだった。



友情が壊れる原因が違うと思った。

一方で、特に悩まずに「ない」にポジショニングした生徒も数人いた。「異性同性関係なく、1人の友達、仲間として仲良くしていけばいいじゃん」とコメントが記載されていた。また、結局また分からなくなり、真ん中を選ぶ生徒も増えた。

久しぶりに藍子が健に話した場面では、2人の中の「信頼」に気付けた生徒も多く、よい友達関係の在り方についてよく考えられてはいたが、もう少し、「信頼」について押さえて、着地点を考える必要があった。

～希望と勇気、努力と強い意志～

山口市立大海小学校

1 本授業におけるポイント

- 事前アンケートを行うことで、導入では学習内容を自分事として捉えたり、ねらいへ迫るための興味・関心を高めたりできるようにする。また、終末では、今後の生活につながる意欲をもてるようにする。
- 「こころのメーター」や付箋を活用することで、自分の立場を明確にしたり、意見を整理したりするとともに、自分や他者の考えを直感的に理解できるようにする。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 やりぬく心 「さかあがり できたよ」（東京書籍）
- 2 ねらい

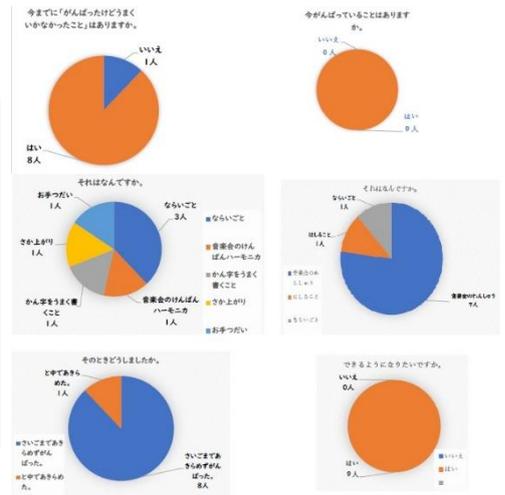
「わたし」が逆上がりの練習に取り組み続けた理由を考える活動を通して、自分のやるべきことは最後までやり遂げようとする道徳的態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 本時の課題を把握する

教師：「がんばったけど、上手いかなかったこと」アンケートの結果を発表します。
（アンケート結果の円グラフを提示）

児童A：あきらめなかった。
児童B：自分はできないときがある。
児童C：わたしにもできないときがある。
児童D：先生、助けてって言う。
教師：逆上がりをがんばっている女の子の話をします。がんばりたいことを続けるためには何が必要でしょうか？



○ 指導上の留意点・支援等

事前アンケートの結果を見せることで、児童が学習内容を自分事として捉えたり、学習への関心や意欲と高めたりできるようにする。

(2) 展開 教材文を読み、あきらめてしまいそうになった気持ちや練習を続けることができた理由について話し合う。

教師：練習してもできなかったことがあるのよね。そのときどうしたでしょう。
（タブレット画面の「こころのメーター」を操作。画面を見せながら発表。）

児童A：あきらめる。
児童B：迷う、どっちもある。
児童C：がんばったら後悔しない。いつかあきらめそうになったことがあるから。
児童D：あきらめたら後悔しそう。ちょっとはあきらめてしまいたい。練習してもできなかったから。
教師：「わたし」は どうして練習を続けることができたのでしょうか。
児童：各自、付箋に練習を続けられた理由を書き、ペアや学級全体での話し合いを進める。



○ 指導上の留意点・支援等

「こころのメーター」を操作することで「わたし」の中にネガティブな気持ちもポジティブな気持ちもあることを直感的に捉えることができるようにする。また、付箋に各自の考えを書かせることで、自分の意見をもって話し合いに参加することができるようにするとともに、他者の考えと自分の考えの相違に気付かせるようにする。

(3) 終末 自分の生活と関連付けて考える。

教師：これからがんばりたいことを続けるために、どんな気持ちで取り組みたいですか。
 児童A：できると信じて。
 児童B：自信をもってやってみたらいつかできる。
 児童C：自分もできるようになりたい。

○ 指導上の留意点・支援等

導入で提示した事前アンケートの結果を想起させることで、今後も努力を続ける意欲につなげていくことができるようにする。

3 評価について

- 努力したことやその結果に対して喜びや苦しみを多面的に考えているか。(ワークシート、付箋、発言、見取り)
- 前向きに努力することについて、今後の思いや願いを考えているか。(ワークシート、発言)

4 実践を振り返って

事前アンケートの結果を円グラフにして提示することで、他の児童がどう考えているかを理解するとともに、教材文の事例を自分に置き換えて考える一助になった。「こころのメーター」を各自が操作し提示することで、「続ける」「あきらめる」という正反対の考えに揺れ動く様子を可視化しながら説明することができた。「こころのメーター」については、ICT機器の利用を工夫することで、各自の気持ちの変化を記録することができるとの助言をいただいた。付箋を利用することで、話し合い前に自分の考えを整理することができただけでなく、その後の話し合い活動において、自然と似た意見をまとめたり、友だちの考えとの違いに気付いたりする様子が見て取れ、活発な意見交換に結びついたと考えられる。

1 本授業におけるポイント

- 事前にアンケートを行い、みんなで使うものについて児童のイメージを確認する。また、本時で学ぶ道徳的な価値について自分のこととして考えられるように校内にある身近なものの画像を提示しながら考えを深めるようにする。
- 主人公が自分のしたこと気付く場面で、ペープサートを通した表現活動を取り入れ、主人公の気持ちと自分を重ね合わせながら考えられるようにするとともに、児童の思考に沿って発問をすることで、多面的・多角的に考えられるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 みんなのものを大切に 「黄色いベンチ」 (光村図書)

2 ねらい

自分勝手に遊んで公共のベンチを汚し、そのあとに座る人の衣服が汚れてしまうことで、自分のしたことにはっと気が付く登場人物の気持ちについて考えることを通して、きまりや約束を守り、みんなで使うものを大切に使うとする実践意欲を高める。

3 学習指導過程

(1) 導入 みんなで使うものを意識できるようにアンケートを活用して自分の考えを整理する。また、公園やベンチにも意識をもつ。

教師：みんなで使うものにはどんなものがあるでしょう。
 児童A：図書室の本や体育館のボールがあります。
 児童B：机やいすがあります。
 児童C：児童遊園のシーソーやブランコがあります。
 教師：みんなが使うものは学校の中だけでなく、公園にもありますね。公園にはどんなものがあるかな。
 児童D：すべり台とかベンチとかがあります。



○ 指導上の留意点・支援等

事前にアンケートを行い、みんなで使うものをイメージさせておくことで、日常生活とつなげて考えられるようにした。また、教材場面における登場人物の様子を自分と重ね合わせて考えられるように雰囲気づくりにも努めた。

(2) 展開 登場人物の気持ちを想像することを通して、みんなのものを大切にすることはどうすることなのか考えを深める。

教師：主人公が「はっ。」と気付いたのはどんなことでしょう。
 児童A：あっ、どうしよう。怒られる。
 児童B：謝らないといけないけど言いにくいな。後で拭いておこう。
 児童C：次の人のことを考えていなかった。
 教師：主人公の気付きで、いいなと思うのはどれですか。
 児童D：「怒られる」は、自分のことを考えていると思います。
 児童E：次に使う人のことも考えている気付きの方がいいなと思います。



○ 指導上の留意点・支援等

場面に登場する人の気持ちを想像できるように表情カードを活用した。また、ペア活動を取り入れて役割演技を行い、友だちの考えも聞き合うよう促すことで、自分の考えを確認し、自分にとって身近な事として考えられるように工夫した。

(3) 終末 日常生活につなげて自分自身を振り返る。

教師：みんなで考えたことをもとにこれから自分はどうしていいか考えてみましょう。
 児童A：みんなのものを使うときは、よごさないようにします。
 児童B：本を借りるときは、次の使う人のことを考えて大切に使うようにします。
 児童C：自分も人も気持ちよく使えるように気を付けて、トイレのスリッパをそろえたいです。

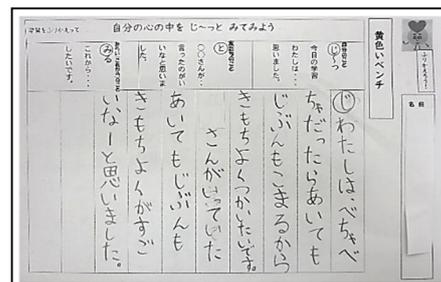


○ 指導上の留意点・支援等

身の周りにあるみんなで使うものについてきまりを確認し、日頃自分がしていることやこれからできそうなことについて考えてみるように促した。

3 評価について

- ワークシートから自分なりに考えたことをみとる。
 - 友だちとの話合いの様子や授業中の発表からみとる。
- 本授業では、以下のことについて評価を行った。
- ・ 登場人物の姿を通して自分なりに考えたり話したりしていたか。
 - ・ 「みんなで使うものを大切に使う」とはどうすることなのかについて自分なりに考えていたか。



4 実践を振り返って

アンケートを事前に行ったことにより、学校の中にあるみんなで使うものをイメージしながら学習することができたので、具体的に自分はどのように使っているのかを振り返り、これからどうするのがよいかについて考えることができた。

また、教材の場面を想起したり、登場人物の気持ちを想像したりするなど、集中して考えられる手立てや雰囲気づくりが大切だと感じた。

展開後半の話合いや反応から、児童は、「きまりを守る」と考えるだけでなく、「自分も人も気持ちよく使えるようにすることが大切」と、マナーについて考えている姿も見られた。それぞれの意見を出し合うことを通して、様々な考え方にふれながら道徳的な価値観を高めていくために、児童の思考に沿った発問について今後も考えていきたい。

～伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度～

宇部市立二俣瀬小学校

1 本授業におけるポイント

- 話し合いの工夫（効果的な話し合いの仕方、自由に意見を出し合える雰囲気づくり）
- 板書を生かす工夫（児童生徒の考えを取り入れる工夫）

2 授業の実際

1 主題・教材名 郷土を大切に 「ようこそ、菅島へ！」（光村図書）

2 ねらい

訪れる人に、島のよさを伝えようとがんばる順平の姿などを通して、国や郷土を大切に作る心について考えさせ、先人たちの努力を知り、国や郷土の自然や文化を大切にし、発展させていこうとする心情を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 自分たちの地域の「好きな場所」を発表する。

| |
|---|
| 教師：二俣瀬の中で、あなたが好きな場所はどこですか。 児童A：桜つつみ公園です。桜がきれいだからです。 児童B：厚東川です。きれいな水が流れていて、魚もたくさんいるからです。 児童C：二俣瀬小学校です。先生が優しいからです。 |
|---|

○ 指導上の留意点・支援等

問いを単純なものにして、児童の今の率直な思いを書くことができるようにする。理由はシンプルなものでもよい。また、好きな場所については写真をあらかじめ準備しておき、その写真と理由をセットにしてロイロノートに提出してもらう。そうすることで、その後の地域に対する思いの変化を確認することができる。

(2) 展開 教材文を読み、順平たちがガイドのためにどんなことをしていたのか想像し、発表する。

| |
|---|
| 教師：順平さんたちは菅島の「好きなところ」を伝えるために、どんなことをしたと思いますか。 児童A：まずはその場所について知る必要があると思います。 児童B：インターネットや本などで調べたらいいです。 児童C：調べるだけでは足りないと思います。実際に行ってみたりそこにいる人に話を聞いてみたりすることが大事だと思います。 教師：どうして実際に行く必要があるのですか。 児童C：ガイドをするときに、言葉に熱がこもらないからです。 児童D：確かに！実際に見た方がそのときの様子とかも分かるし、自分も考えやすいね。 児童A：私たちも実際に写真をとりに行ってわかったこと結構あったよね。滝のきれいな音とか、酒造場の迫力とか。 児童E：順平さんたちも何度も足を運んだからこそ「大切な場所」を見つけたって言うよ。 教師：先ほどみなさんがしてくれた二俣瀬の好きな場所の紹介はどうですか。 児童D：だめというわけではないけど、やっぱり足りないよね。 児童C：そう、愛着はないから、自信をもって紹介できてないね。 |
|---|

○ 指導上の留意点・支援等

子ども同士の対話が活発化するよう、1人の児童のつぶやきを取り上げ、学級全体に質問を投げかけるようにする。また、子ども同士が顔を見合って議論することができるように、机の配置を円状にする。そうすることで、相手の発言をしっかりと聞き、同意や反論を言い合う雰囲気をつくることができた。

授業者は児童の発言をキーワードにして黒板に書き取り、ファシリテーター兼記録係として話を進める。

(3) 終末 「大切な場所」とはどんな場所かを考え、自分たちの地域を紹介するために大切なことを発表する。

教師：順平さんのいう「大切な場所」とはどんな場所なのですか。
児童A：ただ調べて出ていた場所ではなくて、何度も足を運んで発見した場所です。
教師：どうしてそれだけで「大切」と言えるのですか。
児童C：見つけたときに感動したからだと思います。
児童B：その場所についてたくさん調べて、この景色を守っていきたく感じたからだと思います。
児童A：足を運んで、これを守っている人たちの思いを聞いたから大切に思ったのだと思います。
教師：最後に聞きます。あなたにとって二俣瀬の「大切な場所」はどこですか。そこを選んだ理由も書きましょう。
児童A：二俣瀬小学校です。地域の人たちと関わることができて、その人たちのぬくもりや温かさを感じることができるからです。また、いまオープンスクールのためにたくさんの人が動いてくれています。私も一緒に働いてこの学校を盛り上げたいです。
児童B：里山ビオトープです。僕は昔から自然の中で過ごしてきて、動植物のことをよく知っているつもりでした。しかし、地域の人からビオトープのめずらしい動植物について話を聞いて驚きました。そんなめずらしい動植物をこれから守っていきたくです。

○ 指導上の留意点・支援等

主発問に繋がりのある補助発問を重ねて、児童の考えを深め、主発問を自分事として考えられるようにする。また、導入時と同様、地域の「大切な場所」を写真と理由をセットにしてロイロノートで提出させることで、導入と比較して自分の考え方の変化を見ることができるようになる。

3 評価について

・地域への思いや経験をもとに意見を述べられているかを評価する。また、教材文の人物の行動や思いを評価し、自分の考えと結び付けられているかを発言から見取る。話し合いで意見を交換しながら考えを深めようとしている姿や、地域を大切にしたいという思いや姿勢の表れも評価の視点とする。

4 実践を振り返って

児童が地域への誇りや思いを語り合い、自分たちの住む場所に対して価値を見出そうとしている姿が見られたことは大きな成果である。一方で、一部の児童は発言や記述が見られず、地域への思いや考えを把握することが難しかった。授業参加の形式が限定されたことが影響した可能性があり、今後は個別に表出しやすい手立てを複数用意する必要がある。

～親切、思いやり～

宇部市立小野小学校

1 本授業におけるポイント

- 導入場面で親切にされた経験を想起させることで、学習課題と自分の生活を結び付けさせるようにする。
- 役割演技等の疑似体験的な表現活動を行うことを通して、登場人物の思いや行動を自分事として捉えて、ねらいに迫ることができるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 親切にすると 「はしのうえのおおかみ」 (光村図書)

2 ねらい

うさぎやきつねなどに意地悪をしていたおおかみが、くまに親切にされて心を入れ替える姿を通して、相手に親切にすることのよさについて考えさせ、相手のことを思いやり、優しく接しようとする実践意欲と態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 優しくされるとどんな気持ちになるか話し合う。

教師：小野小学校は、優しく教えてくれる上級生や協力して学び合える友達がたくさんいるけど、優しくされるとどんな気持ちになりますか。

児童A：優しくされると、とてもうれしいきもちになるよ。

児童B：ありがとうという気持ちになるよ。

児童C：でも、優しくできずにけんかになることもあるよ。

○ 指導上の留意点・支援等

6年生が優しく教えてくれている写真を電子黒板で見せ、日常生活や学校生活の中で、親切にされた経験を問い、そのときどんな気持ちだったかを想起させ、親切という言葉を確認する。また、つい意地悪をしてしまった経験も想起させることで、教材中のおおかみの気持ちを共感的に考えていけるようにする。

(2) 展開 「はしのうえのおおかみ」を聞いて、登場人物の気持ちの変化について話し合う。

- ① うさぎやきつねたちに意地悪をしているおおかみの気持ちを考える。
- ② くまの後ろ姿を見送っているときのおおかみの気持ちを考える。
- ③ くまと出会った次の日に、うさぎに親切にできたおおかみの気持ちを考える。
- ④ この後のおおかみは、どうなったか考える。

教師：うさぎさんたちに優しくできたおおかみさんはどんな気持ちでしょうか。
児童A：自分が優しくされて嬉しかったから、自分も優しくしたかったのかな。
児童B：くまさんみたいになれて、いい気持ちかな。
児童C：最初の「えへん、へん。」と最後の「えへん、へん。」はちがうね。

○ 指導上の留意点・支援等

- ・ 役割演技を行うことで、意地悪をして面白がっているおおかみの気持ちに触れることができるようにする。
- ・ 他の動物の気持ちも押さえることで、おおかみの気持ちと対比することができるようにする。
- ・ おおかみの気持ちがどこで変化したかを話し合い、意地悪な心が優しい心へと変わっていく様子を板書で視覚的にとらえさせるようにする。
- ・ 意地悪をしたときの「えへん、へん。」と、親切にしたときの「えへん、へん。」を比べることで、親切にするとどんな気持ちになるか（親切にするこのよさ）に迫れるようにする。
- ・ 今後のおおかみの行動について考えさせることで、親切にし続けることの難しさにもふれ、親切が気まぐれにならないようにすることの大切さにも、目を向けることができるようにする。

(3) 終末 学習をふり返り、これから大切にしたい心（気持ち）を考える。

教師：これからどんな心を大切にしたいですか。
児童A：みんながいい気持ちになる心を大切にしたいです。
児童B：困っている人を助ける気持ちを大切にしたいな。

○ 指導上の留意点・支援等

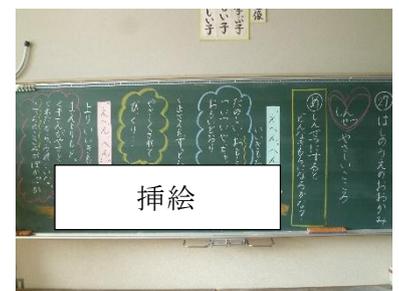
大切にしたい心を自分の言葉にさせることで、自分事として考えることができるようにし、これからの生活への実践意欲をもてるようにする。

3 評価について

- 一生懸命考え、その考えを伝えていたか。（見取り、発言）
- 親切にされるとうれしいという価値観だけでなく、自分も親切な行動をしているという価値観へと広げていたか。（発言、ワークシート）

4 実践を振り返って

低学年にとっては「親切」は少し難しい言葉だったが、導入場面で、実生活の中での経験を電子黒板で映すことによって、児童は身近な行動として「親切」について考えることができた。また、役割演技を通して登場人物の気持ちを考えさせることで、親切にするとどんな気持ちになるのか、自分事として考えることができた。終末では、自分が親切にすると相手も親切になり優しさが広がるということに気付くこともでき、実生活に生かす意欲を高めることができた。



1 本授業におけるポイント

- 敢えて教材の順を入れ替え、『親切、思いやり』についての教材の後、『礼儀』の教材を扱う。単元化することでより自分事として捉え、良さについて実感することができるようにする。
- 動作化により状況を把握させ、多様な考えを引き出した上でねらいに迫れるようにする。児童の発言を基に対比的・構造的な板書を工夫することで、思考を整理できるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 真心をもって 「れいぎ正しい人」 (日本文教出版)

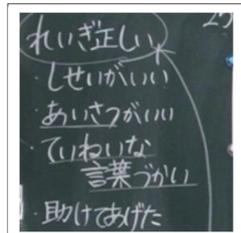
2 ねらい

「礼儀正しさ」は、挨拶の言葉や行いでもあるが、挨拶がなくても、真心を込めた対応の仕方でもあることに気付き、誰に対しても心を込めて接しようとする態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 「礼儀正しさ」について既存の知識を確かめる。

教師：「礼儀正しいね。」と言われたことがありますか？それはどんな時ですか？
 児童A：言われたことはない気がするよ。
 児童B：よい姿勢で挨拶した時や丁寧な言葉遣いをした時に、先生にほめられたよ。
 児童C：おばあちゃんの手を引いて階段を下りてあげた時に言われたよ。



○ 指導上の留意点・支援等

具体的な例を挙げさせることで、この時点での「礼儀正しい」という言葉の概念を共通理解しておく。授業前後の変容を捉えさせるために書き残しておく。

(2) 展開 1日目と2日目の主人公の変化を考える。

教師：2日目、何も言わずに職員室の扉を開けてしまったけれど、先生にほめられたまさお君は、どのようなことを考えただろう。
 児童A：ロックも挨拶もしなかったのに、ほめられた。言葉はなくても、伝わるんだな。
 児童B：お兄さんみたいに、自然と相手に親切にすることができた。これも礼儀正しいということなんだな。
 児童C：人助けができるようになりたいな。
 教師：1日目のまさお君は礼儀正しくなかったのかな？
 児童D：いや！まあまあ礼儀正しいよ！
 教師：授業の始めは丁寧な言葉遣いやあいさつができる人は礼儀正しい人と思っていたよね。
 児童E：言葉や挨拶がなくても、相手のことを考えて、自然にできる人が礼儀正しい人だよ。

※スーパーの出口でお兄さんとすれ違った時、お兄さんが扉を押さえておいてくれたところを動作化し、状況を把握させておく。(その後中心発問)



○ 指導上の留意点・支援等

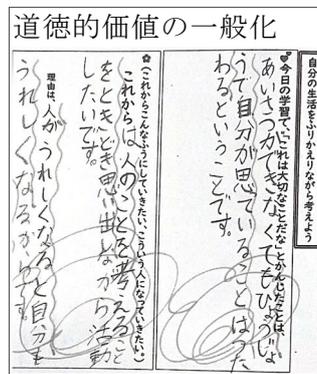
①時系列で4つの出来事とそれぞれの「礼儀正しい行動の理由」を押さえておく。②動作化をすることで、お兄さんの思いに寄り添いやすくさせる。③1日目と2日目とでは「礼儀正しい人」に対する概念が変わったことに気付かせる。④礼儀正しい人とはどんな人か、表にまとめて整理する。その際、話し合いの中で出てきたキーワードをもとに項目を作り、ねらいに迫る。

(3) 終末 本時の学習をふり返り、自分の考えを書く。

教師：友達の発言などをふまえて、『これからは(も)』という書き出しに続けて、自分の考えを書きましょう。理由も書きましょう。

児童A：言葉がなくても、相手のことを考えた行動をすれば思いが伝わると分かった。自分もうれしくなるから時々思い出して礼儀正しくしていきたい。

児童B：もっと人助けをしたいと思った。ほめられるから。



○ 指導上の留意点・支援等

改めて自分の経験を語らせることで一般化を図る。

授業前の「礼儀正しさ」と授業後のそれとの変容に目を向けさせる。

3 評価について

- 「礼儀正しさ」が他者への思いやりを自然に行動で表すことでもあると気付き、心のこもった対応の大切さを理解し、誰に対しても心を込めて接しようとする事について考えているか。(展開・発言、ワークシート)
- 「礼儀正しさ」や「自己の生き方」について、一面的な見方から多面的な見方へと発展させているか。(終末・発言、ワークシート)

4 実践を振り返って

授業前にアンケートをとったり、「あなたが思う〇〇(道徳的価値)とは」と尋ねたりした際は黒板に書き残しておき、展開後段で深まった道徳的価値観と比べることで変容に気付かせるようにしてきた。

ねらいに迫る“深い学び”となるように補助発問を準備したり、状況によっては役割演技やホットシーティングなどの手法を駆使したりしてきた。しかし、「学び」を深めるための「活動」になっていたかという疑問が残る。多様な考え方を引き出すことができ、道徳的価値のよさを実感させることにもなるが、言いつ放しになってしまい、自分の生き方を考えるまでに至っていなかった。そこで、そうした手立てと併せて、子どもたちの言葉を拾い、構造的な板書をする事を意識してきた。子どもたちの思考の現状を表したり、広がりや深まりを助けたり、対比・整理したりと、考えの変容を気付かせるのに有効であった。

「ねらい」を確実にもつことで、中心発問や補助発問、問い返しが明確になっていくことも実感しているが、それに固執するあまり、“自己を見つめる”という部分に欠ける授業が増えたようにも思う。多様な考えを認め合い、自分自身と向き合わせることが今後の課題である。より発問を精選し、自分事として考えさせることで本当の意味で“生きる”道徳科の授業を行っていきたい。

1 本授業におけるポイント

- 学校教育目標「すてきな大人への成長」と関連付けることで、生徒が自分ごととして考えることができるようにした。
- 個で考える、小グループで意見交換をする、クラス全体で意見発表をするなど、多面的・多角的な見方や考え方をもてるようにした。

2 授業の実際

1 主題・教材名 公正な態度 「ヨシト」 (日本文教出版)

2 ねらい

同調圧力に流されて傍観し異質な存在を排除してしまう人間の弱さを乗り越えて、集団の一人として正義を貫く努力が大切であることに気づき、差別や偏見のない公正な集団をつくろうとする実践意欲を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 「すてきな集団」について考えをもち、本時のテーマを確認する。

教師：「すてきな集団」とはどのようなものでしょうか。

生徒A：まとまりのある集団。

生徒B：みんなが元気である。

教師：勝山中学校の学校教育目標は「すてきな大人への成長」です。それを踏まえて考えるとどうですか？

生徒C：何事に対しても一生懸命に取り組む。

生徒D：みんなが誰にでも優しく接することができる。

教師：いいですね。今日は集団における自分の在り方について考えましょう。

○ 指導上の留意点・支援等

- ・自分たちのクラスや学年の様子をイメージさせる。
- ・学校教育目標に関連付けて考えさせることにより、自分事として捉えやすいようにする。

(2) 展開 「ヨシト」を読み、僕の行動を変えた心の変化について考える。

教師：僕に「しっかりと顔を上げさせた」のは、何でしょうか。

生徒A：ヨシトはすごい。それに比べて僕は情けない。

生徒B：ヨシトは悪くないのに、それを笑うのは許せない。

生徒C：周りを気にして、流されているのはダメだ。



○ 指導上の留意点・支援等

- ・「しっかりと顔を上げる」に至るまでの僕の心の動きを考えるように促し、周囲に同調せず、正義に基づいて行動しようとする僕の決意に気づかせる。
- ・個人で考えた後、班で意見交換をしてまとめていく。その後、全体に発表し、学級全体で意見を共有する。

(3) 終末 公正、公平な態度について考える。

教師：しっかりと顔を上げて決意したアツシのようになるために大切なことは何でしょうか。
生徒A：相手のことを知り、気持ちを考えることが大切だと思う。
生徒B：自分と違うからと否定せず、違う人とも認め合うこと。
生徒C：周りに流されず、自分の意見を貫き通せるようになりたい。
教師：では、これからの自分のあり方について考えたことをノートに書いてみましょう。



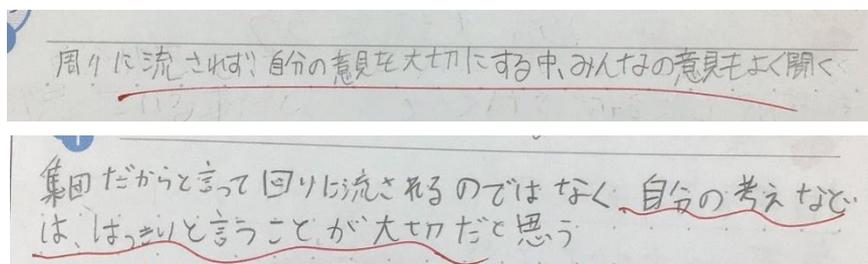
○ 指導上の留意点・支援等

- ・僕（アツシ）の行動と自分の生き方を照らし合わせて、自己のこれからの生き方についての考えを深めさせる。
- ・集団の中における自分のあり方を模索しながら、みんなですてきな大人へと成長していこうと、話をする。

3 評価について

評価方法

道徳ワークシートの記述や、授業中の活動の様子から、公正、公平な行動について考えを深めたり、広げたりする姿が見られたか評価する。



4 実践を振り返って

成果

- ・授業の導入で本時のテーマを確認することで、自分のクラスや自分自身に目を向けることができた。また、本校の学校教育目標である「すてきな大人への成長」という言葉とつなげて考えさせることで、テーマを自分事としてとらえることができたように感じている。
- ・個で考える、小グループで意見交換をする、クラス全体で意見発表をする時間を設けることによって、多様な意見に触れ、多面的・多角的な見方や考え方もつことができた。

課題

- ・人前で自分の考えを表現することが苦手な生徒もおり、クラス全体での意見共有の際に、考えを発表できなかつたり、小さな声になってしまつたりする生徒もいた。今後は ICT 機器を活用して生徒の意見や考えを集約し、共有することも学校全体で取り組んでいきたい。

1 本授業におけるポイント

- 近くの席の友達だけではなく、一対一の形でクラス全員と意見を交流することで多くの考えにふれられるようにする。また、自分とは異なる意見をもった友達と話し合うことで新たな考えを得て、自分の考えが深まるようにする。
- 展開では問題意識をもてるようにするために、終末では道徳的価値の自覚を深めるために、発問を工夫する。

2 授業の実際

1 主題・教材名 親切な思い「くずれ落ちたダンボール箱」（日本文教出版）

2 ねらい

親切・思いやりは、相手に認めてもらいたい心ではなく、一心に相手のために思い自分にできることをしようとする心から生まれることに気づき、思いやりの心で親切にしようとする心情を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 おばあさんを助けたのに店員に注意された時の私の気持ちについて考え、話し合う。

教師：「いいえ、いいんです。」という私はどのように感じていたでしょうか？
 児童A：いいことをしたのに注意されて悔しい！
 児童B：店員さんにきちんと事情を伝えたい。
 児童C：こんなことなら、親切にしなければよかった。
 児童D：おばあさんに言おうかな・・・。

○ 指導上の留意点・支援等

親切にしたのにも関わらず、店員さんに事情を聞かれることもなく注意されている状況を全体で共通理解する。また、「店員さんに事情を伝えたい。」「おばあさんに言いたい。」という意見を出させるとともに、伝えることでおばあさんや男の子を悲しませる可能性があることも理解できるようにする。

(2) 展開 おばあさん、店員さんに伝えるべきかどうかを考え、友達と話し合う。

教師：おばあさん、店員さんに本当のことを伝えますか？その理由は？
 児童A：伝えません。伝えてしまうことで、おばあさんが責任を感じてしまうし、嫌な思いをしてほしくないから。
 児童B：伝えます。伝えないと、自分がモヤモヤして悩むから。
 児童C：伝えません。勘違いされるのは嫌だけど、わざとではないから。
 児童D：伝えます。男の子が同じことを繰り返さないように言ってあげるべきだと思うから。



ロイロノートを使い、赤と白の表示で自分の意思を示す

○ 指導上の留意点・支援等

まず、伝えるか伝えないかという自分の立場をはっきりさせる。その際にタブレットを使用して、誰がどちらの立場なのかを捉えやすくする。(白→伝えない、赤→伝える) 話し合う際には、同じ立場の友達から話し合わせるが「理由は同じなのか確認してみて。」と声をかける。こうすることで、同じ立場でも異なる理由をもっている人がいることを意識できるようにする。また、異なる立場の友達と話し合う際には「立場は違うけど、共通点があるかもしれないよ。」と声をかけることで、意識して友達の意見を聞けるようにする。

(3) 終末 深い思いやりとは何なのかについて考えることで価値理解にせまる。

教師：「深い思いやり」ってどういうことだと思いますか？「思いやり」との違いはあると思いますか？

児童A：自分のことではなく、相手にとって何がいいのかを考えて実行することだと思います。

児童B：自分だけではなく、相手も大切にできる助け方を考えることだと思います。

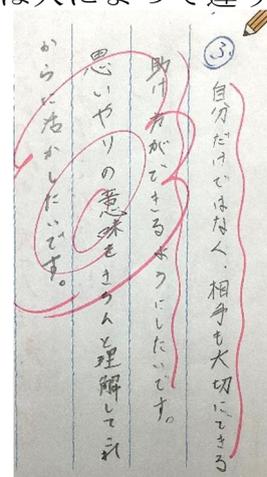
児童C：自分を一番考えるのではなく、相手のことを一番に考えてあげることだと思います。

○ 指導上の留意点・支援等

導入で「思いやり」について聞いているので、再度戻って考えるようにする。その際に相手となる人物(おばあさん)を想像させながら考えさせる。展開での活動を例に挙げながら、相手を思いやりの考え方や行動は人によって違うこともおさえるようにする。

3 評価について

展開にもあげたように、まずはどちらの立場なのかをはっきりさせる。話し合う活動を通して自分の意見が変容する児童もいる。意見が変わった児童に「誰と話をし、どんなふうになったの？」と聞き、全員で共有することで、クラス全体で考えを深めていく。タブレットを使って自分の意見を示すことで、担任にも友達にも意見の変容を見取れるようにする。また、道徳ノートも併用することで、毎回自分の考えをノートにまとめるようにする。



児童の振り返り

4 実践を振り返って

「この学習で、児童に何について話し合わせ、何を育てたいのか？」と毎時間考えることで自分の意識が変わり、発問や板書なども工夫するようになっていった。そうすることで、ただ意見を交わしていただけの時間が、児童同士が議論する時間へと少しだが変わっていったように感じる。今年度は地域の方をお招きして授業に入っただけ、児童と交流をしたり、全体の前で話をさせていただいたりした。大人の考えを聞くことで、児童の考えが広がり深まっていくとすればと思う。また、教室に道徳の足跡を残すことで、いつでも振り返れるようにするなど、自分自身の意識が変わっていったように思う。

しかし、教材によっては児童が議論するところまでに至らないことも多々ある。児童に身に付させたい道徳性は何なのか、どのような発問が心を揺さぶるのかなど、教材研究を重ねていく必要がある。

教室掲示(道徳の足跡)



～感動、畏敬の念～

萩市立須佐中学校

1 本授業におけるポイント

- 縄文杉の胴回りの長さである16.4mのひもを全員で広げてみて、巨木の大きさや七千年の時間を疑似体験させる。また、導入で動画を活用し、屋久島の自然をイメージさせ、資料への興味を高める。
- 個人思考→グループで意見交換→ホワイトボードで共有という流れを通して自由に意見を出し合える雰囲気づくりに努める。また、筆者の感動を「共感的に」受け止められるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 自然への畏敬「樹齢七千年の杉－屋久島」（あかつき教育図書）

2 ねらい

縄文杉を目の前にした筆者の震えるような感動体験を共感的に受け止めることを通して、自然の雄大さや神秘性に気づき、畏敬の念を深めていこうとする道徳的心情を育む。

3 学習指導過程

(1) 導入 縄文杉の大きさを表すひもを広げ、感じたことを問う。

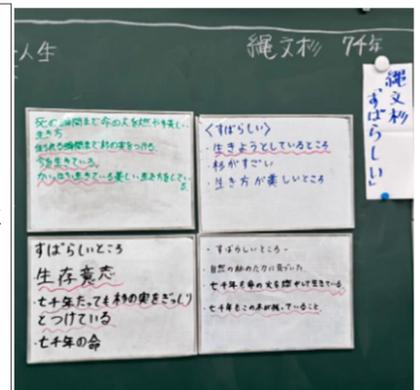
教師：このひもをみんなで広げてみよう。これは何だと思えますか。
 生徒A：わからない。なんだろう。
 教師：これは、屋久島にある縄文杉の胴回りです。
 生徒B：本当に大きいな。
 生徒C：ここまで大きくなるのに、どれぐらいかかるのだろう。
 生徒D：本物を見てみたい。

○ 指導上の留意点・支援等

全員でひもを広げて、身体感覚として大きさを実感させる。その後、映像で屋久島の自然や縄文杉の姿を見せ、資料への関心を高める。

(2) 展開 縄文杉の「美しい生き方」について考える。

教師：筆者が縄文杉を「すごい」と思ったのはどんなところだろう。
 生徒A：七千年も生き続けているところ。
 生徒B：目の前に堂々とたっている姿。
 生徒C：胴回りの太さ、その大きさ、迫力。
 生徒D：今も変わらず青々とした葉をつけているところ。
 教師：筆者が「すごい」を超えて「素晴らしい」と思ったのは縄文杉のどんなところだろう。
 生徒E：倒れる瞬間まで杉の実をつけているところ。
 生徒F：死の瞬間まで、命の火を燃やしている生き方。
 生徒G：力いっぱい今を生きているところ。
 生徒H：杉から「生きたい」という意思を感じるころ。



1 本授業におけるポイント

- 効果的な話し合いの仕方
中心発問に対して、個人で考える時間を確保し、その後に生活班での意見交換を行う。班での意見交換の結果を学級で共有する際に、前に発表した班の意見と似た意見から発表させ、内容の深まりにつなげる。
- 問題解決的な学習
中心発問であいさつのもつ力を考えさせるだけでなく、その力を十分に発揮させるためにはどのようなことを意識するとよいかを考えさせる。

2 授業の実際

1 主題・教材名

あいさつの大切さ 「『愛情貯金』をはじめませんか」（日本文教出版）

2 ねらい

あいさつがもつ力にはどんなものがあるか考えることを通して、互いの存在を認め合い、心を温め合うことで、人と人との関係を深める力があることに気づき、時、場所、場面に応じて適切な言動をしようとする道徳的態度を育てる。

3 学習指導過程

（1）導入 自分の「先手必笑」あいさつ度を振り返る。

教師：自分の先手必笑あいさつ度はどれくらいだろうか。
 生徒A：80% … 他学年の先生にもあいさつをすることができているから。
 生徒B：75% … 急いだりしていると忘れちゃうから。
 生徒C：48% … たまにあいさつをしていないときもあるから。2回目をしていないときがあるから。
 生徒D：30% … 先生には大体するけど、友達にはほとんどしないから。

○ 指導上の留意点・支援等

記入した後に周囲の生徒同士で見比べ、自分の基準と相手の基準が違うことや教師と生徒の対話の中で、時と場所、場合に応じて、理想とするあいさつの形が変わってくることに触れる。

（2）展開 あいさつがもつ力にはどんなものがあるか、その力を十分に発揮させるためにはどうすればよいかを考える。

教師：あいさつがもつ力にはどんなものがあるだろうか。
 生徒A：あいさつをした方もされた方も気持ちよくなれる力
 →存在を認められているから
 生徒B：笑顔にする力
 生徒C：人と人をつなぐ力
 生徒D：その場の雰囲気明るくする力

教師：その力を十分に発揮させるためにはどうしたらよいだろうか。
 生徒A：明るく元気に声色を意識してあいさつする
 生徒B：自分から積極的にあいさつをする
 生徒C：あいさつの後にプラスの一言を付け加える

○ 指導上の留意点・支援等

個人の意見を考えた後、生活班で意見交換をして代表者が発表をする。発表は前に発表をした班の意見と似ていると思う班から発表を行い、ほかの班の意見をよく聞いたり、自分の班とのつながりを意識させたりする。

あいさつのもつ力が出た意見に対して、その力を十分に発揮させるためにはどうしたらよいか具体的な行動を考えさせ、自分事として捉えられるようにすることで、道徳的態度を育む。

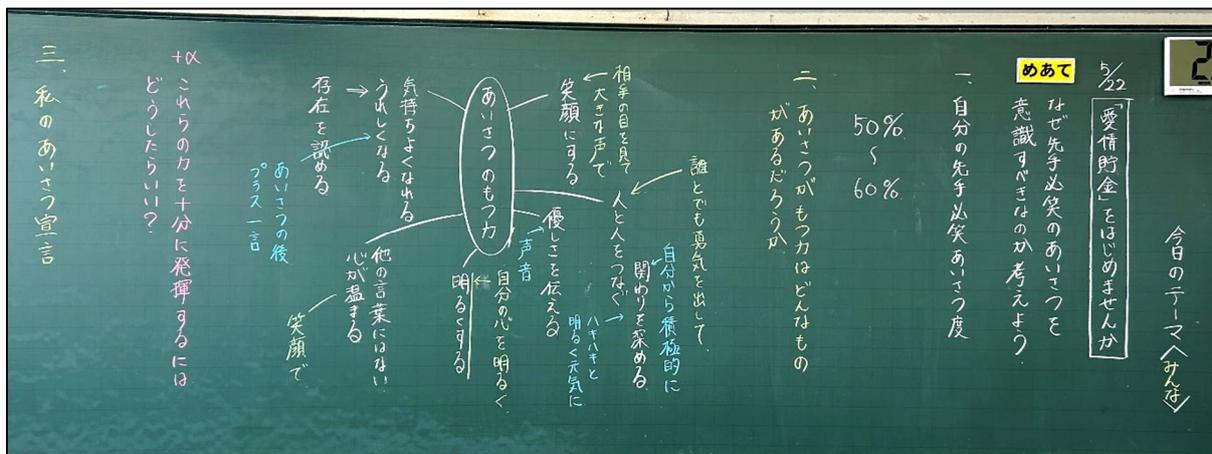
(3) 終末 「私のあいさつ宣言」というタイトルで振り返りを書く。

生徒A：私は笑顔で誰もがうれしくなるあいさつをします！今日の授業ではあいさつはとても大切なことで、人と人をつなぐ役割があり、人間にとって、とても大事だということがわかりました。

生徒B：先手必勝のあいさつをもっとグレードアップさせてあいさつをしたい。あいさつのもつ力を十分に発揮させてあいさつしたい。

○ 指導上の留意点・支援等

振り返りで出てきた意見を匿名で道徳通信にて紹介し、他者の意見に触れる機会を設定する。



3 評価について

○ あいさつが人間関係や社会生活を円滑にするものであることや、時、場所、場面に応じた言動や行動をしようとする発言や記述が見られたか。

4 実践を振り返って

○ 成果

主発問で出てくるであろう答えに対して、追加の発問をあらかじめ考えておくことで、生徒自身がこれからどのような行動をしたらよいかを考える場面に円滑につながる事ができた。また、生徒の振り返りには、今後の取組に関する記述も見られた。

○ 課題

この時間で考えたことを一過性のものにならないためにはどうしたらよいかを今後の課題として考えていきたい。

1 本授業におけるポイント

- 黒板の中心に一本の時間軸を示して、緒方洪庵の行いや考え、それに対する児童の考えをその軸に加筆していくことで主題に迫れるように工夫した。
- 生命の重みという主題に迫ることができるように、児童の思考の流れに沿った発問になるよう、発問内容を工夫した。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 生命の重み 「命の種を植えたい-緒方洪庵-」
(日本文教出版)

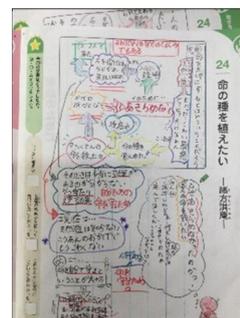
2 ねらい

生命は、そのものがかけがえのない、唯一無二のものであり、その生命を守るために多くの人の並々ならぬ努力があることを理解し、生命を尊重しようとする心情を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 命と聞いて、何を連想するか発表する。

教師：命と聞いて、何を連想しますか。
 児童A：大切な物。
 児童B：生き物。
 児童C：心臓。
 児童D：大事にしないといけないもの。
 児童E：親からもらったもの。

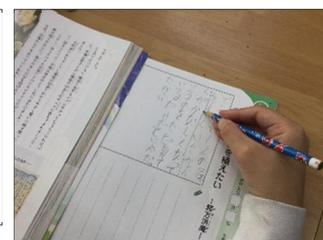


○ 指導上の留意点・支援等

発表しやすい雰囲気ができるように、発問の後にペアワークを行い、自信をもって発表できるようにする。

(2) 展開 命を大切にするととは、どういうことを考える。

教師：洪庵があきらめずに一年以上も訴え続けたのはなぜだろう。
 児童A：病気の人を救いたいから。
 児童B：今までの努力を無駄にしたくない。
 児童C：明るい未来を築きたい。
 *キーワードの価値付け
 ・つながる命 ・努力 ・たくさんの人の思い

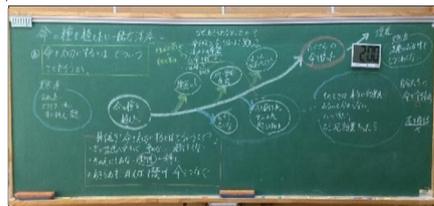


○ 指導上の留意点・支援等

種痘を批判した人たちの行動についても考えさせることを通して、様々な立場で命を大切に思う行動がとられていることに目を向けさせ、ねらいにある生命を守るために、多くの人の並々ならぬ努力に気付くことができるようにする。

(3) 終末 振り返りをする。

教師：緒方洪庵の学習を通して、学んだことは何ですか。
児童A：緒方洪庵のようなたくさんの人の努力や思いがあって、今あるみんなの命につながっていることを忘れないように命を大切にしていきたい。
児童B：命は大事にしなくてははいけないとは思っていたけど、今日の勉強を通してさらにその思いが強くなった。

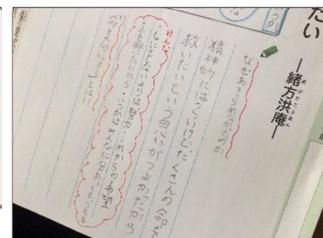


○ 指導上の留意点・支援等

洪庵の努力は今の自分たちの生活や自分たちの今ある命につながっていることに気付くことができるよう、時間軸のその先を想像させる。

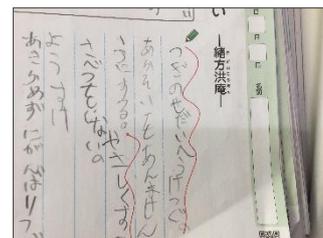
3 評価について

- 授業の導入と終末に同じ発問「命を大切にすることはどういうことだろうか」を考えることを通して、かけがえのない生命について考えを広め、深めているか。(道徳ノート)
- かけがえのない生命を守るためには、並々ならぬ努力があったことに気付いているか(発言)



4 実践を振り返って

今回、「命の種を植えたいー緒方洪庵ー」を通して、生命の重みを考える中で、生命は、そのものがかけがえのない、唯一無二のものであり、その生命を守るために多くの人の並々ならぬ努力があることというねらいに気付くことができるよう、いくつかの手立てを考えた。



まずは板書の工夫である。一本の時間軸を中心に展開していくことで、内容のあらすじや場面ごとの心情の移り変わりを主題からぶれずに考えることができた。また、それぞれの場面で考えたことにつながる意見があった際にも、つながりを板書に示しやすく効果的であった。洪庵がたくさんの命を救った、その先の未来(現在)を考えることを通して、洪庵の努力が現在の命につながることに気付くこともできたことが大きな成果であった。

次に、発問内容の工夫である。今回の教材は命の重みを考える教材であるが、洪庵のあきらめない姿勢や努力する姿は児童にとっても強く印象に残る場面が多い。そのため、それらの姿に着目しすぎて命の重みという点から思考がずれてしまわないかを懸念していた。そこで、中心発問の後に、種痘を批判した人の行動に目を向ける発問を投げかけることで、その人たちも命懸けでの行動であることに気づき、生命の重みという道徳的価値に迫る発問を考えた。その成果もあり、振り返りの中で命のつながりやたくさんの人の思いや努力といった大切なキーワードが書かれていた。

一方で、導入の時間で命について自分事として考えている児童は少なく、授業の始まりに生命の重みについてさらに自分事として考えるための手立てがあるとよいと感じた。児童にとって難しい主題ではあるが、学ぶ意味や意義をより実感できるような手立てを今後も考えて実践につなげていきたい。

1 本授業におけるポイント

- VRによる都市型浸水（宮城県仙台駅前）の様子を視聴し、柳井市の洪水ハザードマップで自宅位置を確認させることで、災害を身近なこととして切実感をもって考えることができるようにする。
- 避難するか家にとどまるかを選択させることで、自分ごととして主体的に考える場面を設定する。さらに、地域の方の意見を聞き、選択の根拠について多面的・多角的に考えさせるとともに、かけがえのない命を尊重する心情を育む。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 「命を守る」－いざというときに備えるために
「夕暮れどきの避難」（東京書籍）

- 2 ねらい

自然災害によって生死を分ける緊張した場面・状況を多角的に想定させることを通して、生命を尊重しようとする心情を基にした道徳的判断力を育てる。

- 3 学習指導過程

- (1) 導入 VRによる都市型浸水の様子を視聴し、柳井市洪水ハザードマップで自宅の位置を確認する。

| |
|---|
| <p>教 師：VRの最後にあった「ハザードマップ」ですが、柳井市洪水ハザードマップで自分の家の位置を確認してみよう。</p> <p>生徒 A：自分の家がどこにあるんか分かん。</p> <p>地域の方：ここが学校だから、このあたりじゃない？</p> <p>生徒 B：うちは黄色い色のついた地域にある。</p> <p>生徒 C：うちがあるとこは色がついていない。</p> <p>教 師：自分の家のある地域の色が分かった人は手を挙げて。</p> |
|---|

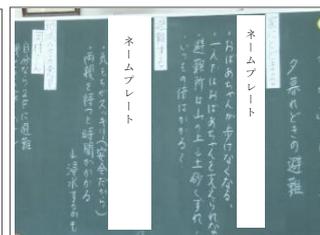


- 指導上の留意点・支援等

VRによる都市型浸水の様子から洪水を疑似体験させ、VRの最後に出てくる「日頃からハザードマップを確認しましょう。」という言葉に繋げて柳井市洪水ハザードマップをタブレットで検索させる。マップで自宅位置を確認するのが難しい生徒に対して、地域の方にサポートしていただき、交流のきっかけとなるようにする。

- (2) 展開 自分が主人公なら、避難場所に行くか自宅にとどまるかを選択する。

| |
|---|
| <p>教 師：あなたが主人公なら、避難場所に行きますか、それとも家にとどまりますか。どちらかを選び、理由も教えてください。</p> <p>生徒 A：激しい雨が降っているのにおばあちゃんを歩かせると危ないから、家の2階にいた方がいい。</p> <p>生徒 B：みんなが避難するときに、近所の人と一緒に避難したらいいと思った。</p> |
|---|



- 指導上の留意点・支援等

避難場所に行くか家にとどまるかについて、ネームプレートを黒板に貼って

自分の選択した立場を示し、理由を発表させる。教師はファシリテーターとして生徒の意見を繋いだり、意見の相違を明確にしたりする。例えば「おばあちゃんが途中で歩けなくなっただけではいけないから、2階にいた方がよい。」に対して、「おばあちゃんは素早い行動ができないから早いうちに避難した方がよい。」という意見を照らし合わせ、おばあちゃんがしっかり歩けないかもしれないことに対する考えの違いを明確にしていく。

(3) 終末 地域の方の意見を聞いて、考えを広げたり深めたりする。

| | |
|------------------|--|
| 教師 | 意見がいろいろ出ましたが、今度は地域の方の意見を伺ってみましょう。 |
| 地域の方A (男性) | 私がこの女の子のお父さんの立場だったら、親として、いざという時にはあなただけでも逃げてほしいと思う。スマホなどで情報をしっかり得て、自分とおばあちゃんの体力を考えて行動してほしい。 |
| 地域の方B (女性) | 私がこの女の子のおばあちゃんの立場だったら、避難したくない。この女の子にはおばあちゃんの意見も聞いてほしい。もしもの時には女の子一人で逃げて(あなただけでも)助かってほしい。また、一人で先に避難所に行って、後で大人を連れてくるという方法もある。 |
| 地域の方C (市役所職員) | 私なら2階に避難するのがよいと思う。大雨が降りそうなら、朝テレビを見ながら雨がひどくなった時のことを家族で話し合っておくとよいと思う。また、避難所に行かなくても、親戚の家やホテルに泊まるなどの選択肢もある。 |

○ 指導上の留意点・支援等

地域の方には、予め、教科書本文の「お父さんの立場」「お母さん・おばあちゃんの立場」「防災の専門家の立場」からの意見を言っていたくようお願いしておく。

3 評価について

○ 評価方法(ワークシート)

①授業で出た意見の記述欄を見取る。

自分の考え、自分とは違う意見や地域の方の意見を書いているか。

②「振り返り」の欄を見取る。

自分とは違う意見や地域の方の意見を聞いて、新しい視点を得たり、自分の考えを広げたり深めたりしているか。

The worksheet contains handwritten notes in Japanese. It has several sections with headings like '自分の考え' and '振り返り'. There are also some numerical indicators like '(4-1-2-1)' and '(4-3-2-1)'.

4 実践を振り返って

自然災害が起こった場面を、緊張感をもって考えさせるために、VRを用いて疑似体験をさせたのは効果があった。また、柳井市洪水ハザードマップで近くの川が氾濫した際の自宅の浸水深の目安を知ることが、課題を自分ごととして考えることに繋がった。

地域の方の意見は、生徒の視点からは出ない意見であり、はっとさせられるものだった。例えば「いざというときはあなただけでも逃げて助かってほしい。」という地域の方の意見に対して、「それはできない。後で罪悪感が残って逃げ切れた気がしない。」「一人では逃げられない。」「でも、本当にやばくなったらどうしよう。」など、生徒は考えを揺さぶられていた。自分の命は、他の人からも大切にされるかけがえのないものだということを、地域の大人の意見から生徒たちは感じていた。今後、「命の連続性・有限性」といった視点からも「生命の尊さ」を考える授業を仕組んでいきたい。

1 本授業におけるポイント

- 家庭や地域社会との連携
地域の方に参加していただき、グループ学習や全体共有で生徒だけでは発見できない考えに触れ、地域の方の豊かな人生経験を聞くことができる機会とする。
- 問題解決的な学習
今までの経験を振り返りながら、「弱い心を乗り越えるために必要なことは何か」という問いを考えることで、自分自身の今後の生き方について考えを深める。

2 授業の実際

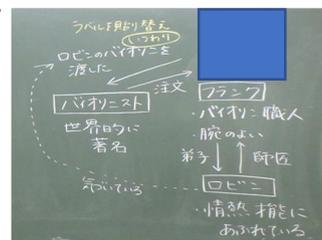
1 主題・教材名 心の弱さを強さに変える 「いつわりのバイオリン」
(あかつき教育図書)

2 ねらい フランクの心の葛藤を考えることを通して、心の弱さに負けずそれを乗り越えるために、自分に恥じない生き方を見出そうとする道徳的心情を育む。

3 学習指導過程

(1) 導入 めあてを確認し、物語の内容を把握する。

教師：本時生き方について考えていく。今まで何年生きてきたか。
生徒A：12年。
生徒B：13年。
教師：今日は今まで生きてきた経験を振り返りながら、これからどのように生きていきたいかを考えていく。
内容の整理をしていく。

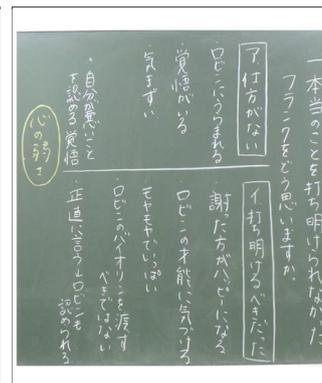


○ 指導上の留意点・支援等

- ・登場人物や場面の確認をすることで、物語の内容を把握させる。板書し、図式化することで、物語の内容を視覚的に分かりやすくする。

(2) 展開 登場人物(フランク)の心の弱さを考え、グループや全体で共有する。

教師：ロビンが故郷に戻る前に、本当のことを打ち明けられなかったフランクのことをどう思うか。
A. 仕方がない B. 打ち明けるべきだった
生徒A：B. 打ち明けるべき。言えないのは仕方がないけれど、謝った方がお互いハッピーになれる。
生徒B：B. 打ち明けるべき。言わないとモヤモヤでいっぱいになる。
生徒C：A. 仕方がない。ロビンに恨まれるかもしれないから言えない。
生徒D：A. 仕方がない。言うまでには覚悟がいる。
教師：言わないといけなけれど、言えないという経験はあるか。
弱い心に負けてしまうことは誰しもある。

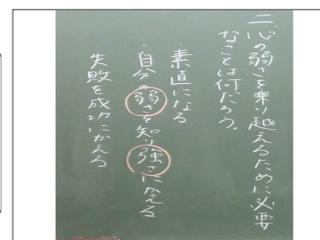


○ 指導上の留意点・支援等

- ・ 個人で考えさせた後、グループで共有する。グループ協議には地域の方にも入っていただき、一緒に意見交換をする。
- ・ 打ち明けるチャンスがあったのに黙っていたことも「心の弱さ」であることに気付かせる。
- ・ 「本当のことを言い出せない」「やってはいけないと分かっているがごまかしてしまった」という経験は大人も子どももあると思われるので、次の発問や地域の方との対話につなげる。

(3) 終末 これからの生き方について考える。

教師：心の弱さを乗り越えるために必要なことは何か。
 生徒A：素直になる。
 生徒B：弱い自分も受け入れて、強い自分になっていく。
 生徒C：失敗を成功に変える。



○ 指導上の留意点・支援等

- ・ 心の弱さと闘った経験などをグループで話し合わせる。
- ・ 全体共有の時間に、地域の方の経験談を聞く場を設け、誰しも心の弱さをもっており、それを克服しようとする強さをもっていることを生徒に気付かせる。

3 評価について

- ワークシートには、感想と自己評価を記入する欄を設け、①自分を振り返りながら考えることができたか。②友達や地域の方の考えを聴き、自分の意見を深めることができたか。③授業前後で自分の考えに変化があったか。を振り返らせる。
- 心の弱さとは何か考え、それを乗り越えるために必要なことを見出し、自分の心の弱さや醜さを克服する強さや自分の良心に恥じない生き方をめざそうとしている。

| | |
|---|-----------------|
| 【自己評価】(4:とてもそう思う、3:そう思う、2:あまり思わない、1:思わない) | |
| ① 自分を振り返りながら考えることができたか | (4) - 3 - 2 - 1 |
| ② 友達や地域の方の考えを聴き、自分の意見を深めることができたか | (4) - 3 - 2 - 1 |
| ③ 授業前後で自分の考えに変化があったか | (4) - 3 - 2 - 1 |

4 実践を振り返って

地域の方と共に学ぶ道徳を実践したことで、生徒は多面的・多角的な意見に触れることができ、思考を深めることができた。また、地域の方の経験や考えを聞くことで、今後の生き方について深く考えることができた。

課題については、地域の方とグループで話し合う時間が十分とれなかったため、2時間授業にして話合いが十分行える時間を確保できるとよいと思った。また、グループに一人地域の方に入っただけだと、よりよい学び合いができると考える。

～節度、節制～

平生町立平生小学校

1 本授業におけるポイント

- 教材を自分事として考えられるように、経験を想起させる機会を設けること。
- めあてと振り返りの文言を統一し、授業の中で一貫した道徳的価値について考えられるようにしたり、児童の変容が見取れるようにしたりすること。

2 授業の実際

1 主題・教材名 他の人のことを考えて「金色の魚」(Gakken)

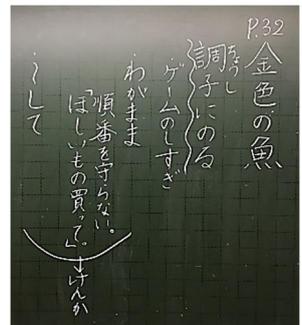
2 ねらい

身勝手にわがままな行動や発言を抑え、周りの人のことも考えた節度ある生活をしようとする態度を養う。

3 学習指導過程

(1) 導入 過去の身勝手な経験を想起し、本時のめあてを確認する。

教師：今まで、調子に乗り過ぎたことはありますか。
 児童A：家に帰ってゲームをし過ぎてお父さんに怒られた。
 児童B：優しい友達の前でわがままを言い過ぎたことがある。
 児童C：わがままを言い過ぎてけんかになったことがある。
 児童D：してほしいことばかり家族に言っている。



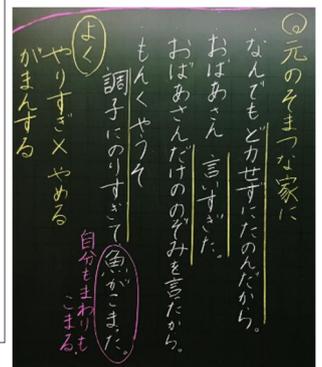
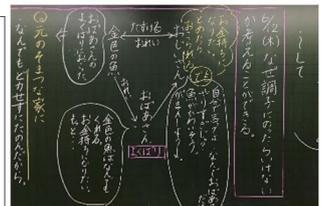
【導入時の板書】

○ 指導上の留意点・支援等

自分の調子に乗って失敗した経験をグループで話し合わせたり、自由に発表させたりすることで、身勝手な行動について押さえた。また、教材文と似た児童や教師の経験を取り上げ、自分事として考えられるようにした。

(2) 展開 登場人物の心情や行動から、身勝手な行動について話し合う。

教師：どうして、おばあさんは、どんどん頼み事をしたのでしょうか。
 児童A：お金持ちになりたかった。
 児童B：おばあさんは、金色の魚はなんでもくれるから、調子に乗ったと思う。
 教師：おじいさんは、どんな気持ちで金色の魚に頼んだのでしょうか。
 児童C：おじいさんもお金持ちになりたかったと思う。
 児童D：もし止めたら怒られると思ったのかも。
 教師：どうして元の粗末な家が変わったのでしょうか。
 児童E：努力せずに魚に頼んだから。
 児童F：文句や嘘をついて、調子に乗り過ぎて魚が困ったと思う。
 児童G：やりすぎは良くない。
 児童H：おばあさんは、やり過ぎる前でやめておけばよかった。
 児童I：調子に乗り過ぎたら、自分も周りの人も迷惑になると思う。
 児童J：がまんしていれば、困らずに済んだかもしれない。



【展開時の板書】

○ 指導上の留意点・支援等

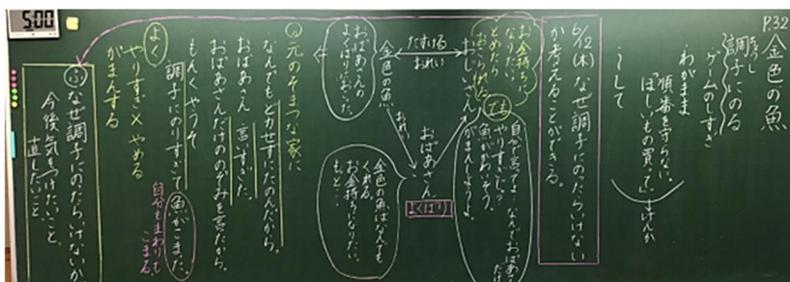
教材文の内容を整理しながら、登場人物の気持ちを考えさせた。登場人物の視点を変えることで、多角的な意見を抽出できるようにした。また、様々な意見が出やすいよう、積極的にグループで意見交換できる機会を多く設けた。

(3) 終末 本時で学習した価値を基に、自己の生き方について振り返る。

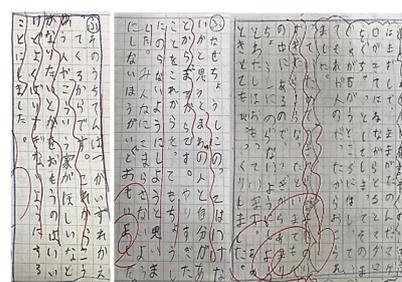
教師：何故調子に乗ってはいけないのか、ノートに振り返りを書きましょう。
児童A：調子に乗り過ぎたら、周りの人に迷惑になるからいけないと思う。
児童B：調子に乗ったら、悪いことが起きるかもしれない。怪我をさせることもあるから、気を付けたい。
児童C：ほしいという気持ちは仕方がないけど、欲しいものがたくさんあっても、欲張り過ぎないようにしたい。
児童D：前、調子に乗り過ぎて困らせたから、やり過ぎないようにしたい。

○ 指導上の留意点・支援等

めあてを再度提示した後、振り返りを書かせることで、導入で想起した自分の経験について焦点を当て、自分事として考えられるようにした。異なった意見を意図的に指名し、全体共有させることで、「何故身勝手な行動をしてはいけないのか。」について深く考える機会をつくった。



【板書の様子】



【振り返りの記述】

3 評価について

- 身勝手にわがままな言動を抑えて、周りの人の事も考えた節度ある生活をする事の大切さを多面的・多角的に考えたか。(発言・話合いの様子)
- 家庭や学校でのこれまでの自分の行動を振り返り、自己の在り方について考えを深めていたか。(発言・振り返りの記述)

4 実践を振り返って

実践のポイントでも示した「経験を想起させる機会」を導入で設けることで、自分事として考える児童が多くいた。「自分もやったことがある。」「よく調子に乗ってお父さんに怒られるな。」といった児童のつぶやきも見られた。そのつぶやきを教師が取り上げることで、展開で「どうしたらよかったのか。」という議論につながった。振り返りを書く際には、今までの経験を基に、今後直していきたい自分の行動や気を付けたいことについて記述する児童もいた。また、めあてと振り返りを同じ文言にしたことで、教師も児童も、本教材で学習する道徳的価値がぶれることがなかった。変容を見取る際にも、有効な手立てだと考えられる。

1 本授業におけるポイント

- 「心のメーター」を使い、自分事として考えたり、そのように考えた理由を明確に友だちに伝えたりできるようにする。
- グループの話し合いに地域の方々に参加してもらい、道徳的価値を多面的・多角的にとらえ考えることができるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 誠実とは 「手品師」 (東京書籍)

2 ねらい

手品師の生き方について考えたり、話し合ったりすることを通して、誠実な生き方のよさに気付き、明るく生きようとする道徳的判断力を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 「誠実」に生きるとはどういうことなのか、言葉からのイメージやこれまでの学習で自分たちの知っていることを出し合う。

教師：これまでに「誠実」という言葉を聞いたことがありますか。
それは、どんなことだと思いますか。

児童A：真面目な人のこと

児童B：うそをつかないこと 正直なこと

児童C：約束を守ること

○ 指導上の留意点・支援等

子どもたちから言葉のイメージが広がらない場合は、国語辞書を活用し「まごころ」とはどんなことなのか一緒に考えようと子どもたちに投げかける。

(2) 展開 教材「手品師」を読んで友達や地域の方々と主人公の葛藤について話し合う。



教師：手品師が「まよいにまよった」選択だけど本当にこれでよかったのだろうか？

児童A：手品師は、大劇場で手品をしても心から楽しめなかったと思う。

児童B：少しは後悔しているかもしれないけど、心はすっきりしていると思う。

児童C：先にした約束は守ったほうがいい。

○ 指導上の留意点・支援等

まず、手品師が「大劇場へ行く」「男の子の所へ行く」ことについて、何に迷っているのか、どちらかを選択することでどんなメリットやデメリットが生じるのかを子どもたちに考えさせる。また、手品師が、男の子との約束を選ん



だわけを「主に男の子のため」「主に自分自身のため」に分けて板書する。そのあとで、「手品師は、男の子との約束を守ることを選んで、自分自身の選択を後悔していないだろうか」と子どもたちに問いかけ、「心のメーター」を活用し、自分自身の考えを明らかにさせてからグループで話し合いを行わせる。子どもたちで話し合わせた後に地域の方に各グループに入ってもらおうようにする。

(3) 終末 本時の学習について振り返り、これからの自分について考える。

教師：手品師の生き方から気付いたことをまとめよう。
児童A：はじめは、誠実な真面目な人のことだと思っていたけど、相手のことを思って相手にとってよいことをすることだと思った。
児童B：相手にとって良いことをすると自分の心もすっきりすることがわかった。
児童C：友達との約束したことは、しっかり守っていきたい。



○ 指導上の留意点・支援等

「手品師は、男の子のことだけを考えていたのだろうか」と問いかけ、相手に対する誠実さのみならず、自分自身への誠実さについても考えさせ、自分自身に誠実に生きることは、前向きで明るい生活を送ることができることに気付かせる。また、導入と終末での道徳的価値の捉え方を比較し、道徳的価値への理解を深めさせ、それを評価付けする。

3 評価について

○ 手品師の生き方について考えたり、話し合ったりすることを通して、誠実に生きることのよさを考え深めているか、児童の発言やノートの記述から見取る。

4 実践を振り返って

本時では、地域の方々と子どもたちが話し合う時間をしっかり確保することに留意した。地域の方々には、事前に「せっかく夢が実現するのだから、劇場に行った方がいいのではなかろうか」や「もう二度とチャンスは巡ってこないかもしれない」など子どもたちの考えを揺さぶる発言をしていただくようお願いしておいた。地域の方々と交えたグループの中で活発に話し合っている様子から子どもたちが、多面的・多角的に考えている様子を見取ることができた。また、男の子のためだけではなく自分自身への誠実さへと考えを広げられた点も立場の異なる方としっかり話すことができたからではないかと思う。このように道徳の授業を通して様々な立場の方と話す機会をもつことは、子どもたちにとって必要なことであると感じられる。今後も、地域の方や保護者の方々の協力を得て定期的に続けていけるとより効果的だと思われる。

1 本授業におけるポイント

- 「マナー違反になるかどうか」という問いに対して、マトリックスを作成し、自分の考えに近い箇所に生徒自身のネームプレートを貼ることで、意見や考え方の違いや多様性を対比的・構造的に示す。
- 生徒たちはバスに乗る経験が少ないことから、教材や発問に対してイメージすることが難しいと予想される。そのため、保護者や地域の方々に参加していただき、生徒たちの思考を促してもらう。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 誰もが暮らしやすい社会のために
「ベビーカー論争」（あかつき教育図書）

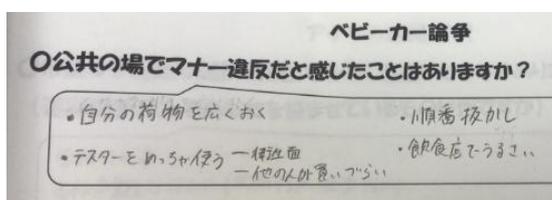
2 ねらい

ベビーカー論争に対する自分の意見を考えたり、他者の意見を聞いたりすることを通して、誰もが暮らしやすい社会の実現に努める道徳的態度を養う。

3 学習指導過程

(1) 導入 自分自身がマナー違反だと感じた場面があるか考える。

教師：公共の場でマナー違反だと感じた場面はありますか？
 生徒A：順番を抜かす。
 生徒B：飲食店で、大声で話す。
 生徒C：自分の荷物を広く置く。
 生徒D：映画館で前の人の席を蹴る。

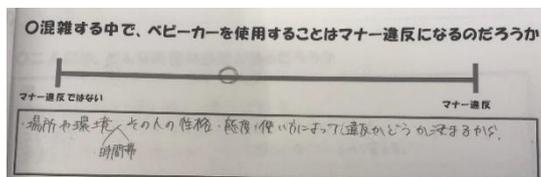


- 指導上の留意点・支援等

公共交通機関を利用する機会が少ない生徒も多いため、まずは公共の場から考えて、マナーに対する考えや意識を確認する。

(2) 展開 混雑時にベビーカーを使用することがマナー違反になるか考える。

教師：混雑する中で、ベビーカーを使用することはマナー違反になるだろうか？
 生徒A：マナー違反ではないと思うが、ベビーカーを利用する人の態度にもよると思う。
 生徒B：誰もが幼いころはベビーカーを利用していたのだから、マナー違反ではない。
 生徒C：しょうがないとはいえ横柄な態度はとらないでほしい。
 生徒D：出入口をふさぐようなら、それはマナー違反である。

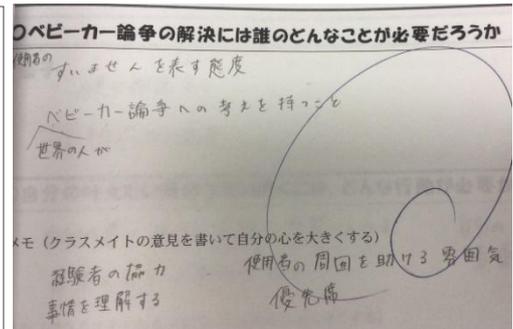


- 指導上の留意点・支援等

他の人の意見を聞き、自分の考えに変容があった際には、黒板に貼っているネームプレートをいつでも動かしてよいこととし、動かした際には、理由を述べるようにする。

(3) 終末 ベビーカー論争の解決に向けて必要なことを考える。

教師：ベビーカー論争の解決には誰のどんなことが必要だろうか。
生徒A：ベビーカーを使う人たちは、使い方について気をつける必要がある。
生徒B：周りの人たちは、優先席をあげたり、必要に応じて手助けしたりする必要がある。
生徒C：周りの人達は助けることも大事だけど、迷惑だなという雰囲気を出さないようにする必要がある。
生徒D：みんなが事情を理解しておく必要がある。



○ 指導上の留意点・支援等

ベビーカーを利用する人に限らず、周りにいる人たちや優先席を利用する人たちなど、様々な視点から必要なことを考えるよう促す。

3 評価について

- 評価方法（見取り、ワークシート）
- 評価の視点
 - ・生徒が一面的な見方から、多面的、多角的な見方へと拡大しているか。
 - ・暮らしやすい社会に向けて、自分事として考え意欲的に学習しているか。

4 実践を振り返って

- ・地域の方とのやりとりや、最後の発問で複数の立場の人のことについて考えることを通して、多面的、多角的な見方、考え方をする生徒が多く見られた。
- ・一方で、ベビーカー論争の話で授業が完結したために、生徒のふりかえりではベビーカーについての発言が多く、主題としていた「誰もが暮らしやすい社会のために」というところまで考えることができていなかった。

～規則の尊重～

防府市立新田小学校

1 本授業におけるポイント

- 同じ内容項目に属する複数の教材を単元化し、共通する価値を見付けるとともに、教材ごとに異なる価値にも気付かせることを通して、児童が内容項目における価値を多面的に捉えることができるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 やくそくやきまりを守る

「日曜日のバーベキュー」「雨のバスていりゅう所で」

(東京書籍)

2 ねらい

登場する人物の直接的・間接的な言動から双方の立場に立って考える活動を通して、周りの人のことを考えて行動することで自分も周りの人も気持ちよく生活できることに気付き、きまりやマナーを守って生活しようとする実践意欲を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 身の回りにあるきまりについて想起し、本時の見通しをもつ。

教師：(写真を見せながら)この場面では、どんなきまりやマナーがあるだろう？
 児童A：ブランコでは、少し時間がたったら順番を代わるよ。
 児童B：エレベーターは、降りる人が先に出るよ。
 教師：きまりやマナーは、なんのためにあるのだろうか？

○ 指導上の留意点・支援等

導入では、内容項目に係る生活場面を具体的に想起させ、教材文にある道徳的価値について「自分ごと・自分たちごと」として迫っていけるようにした。児童の発言を基に、自分自身から人・社会・自然等へ視点を広げたり深めたりすることができるように分類しながら板書にまとめることとした。

(2) 展開 教材文の範読を聞き、話し合う。

①「日曜日のバーベキュー」

教師：きまりを守らずに捨ててきたごみを思い浮かべながら、「ぼく」はどんなことを考えただろう？
 児童A：お母さんの自転車のかごにポイ捨てをする人と同じになっているし、BBQ場の管理者が困っているだろうな。
 児童B：あのたくさん捨ててあったごみを片付ける人も、ものすごく大変なのだろうな。
 児童C：看板を立てた人も、お母さんみたいな気持ちなのかな。

②「雨のバスていりゅう所で」

教師：いつもと全然違う様子で窓の外を見つめているお母さんは、どんなことを考えているのだろうか？
 児童A：よし子、なにしているの。人に迷惑かけているでしょ。
 児童B：周りの人のことが見えていないのかな。
 教師：よし子とお母さんは、それぞれだれのことを考えて行動しているだろうか？
 児童C：よし子は「自分とお母さん」で、お母さんは「周りの人」のことを考えている。

○ 指導上の留意点・支援等

児童が道徳的価値に自分ごととして考えを広げ、深めるために、以下のような学習の工夫や支援を行った。

- ・ 範読と挿絵を連動させたICTの活用
- ・ 即興的な役割演技による心情変化の把握
- ・ 登場する人物の心情変化や立場を明確にした構造的板書

(3) 終末 これまでの生活を振り返り、これからの生き方について考える。

教師：これまで、きまりやマナーを守って生活することができていましたか？また、これからなんのためにきまりやマナーを守っていききたいですか？
児童A：自分は、ごみを決められた場所に、自分で捨てることができていました。これからは、みんなの幸せのために守っていききたいです。
児童B：きまりやマナーを守って生活できたことがたくさんありました。みんなが笑顔で、楽しく暮らすために、きまりやマナーを守っていききたいです。
児童C：きまりやマナーを守らないと、人に迷惑がかかり、世の中がもめ事だらけになってしまいます。

○ 指導上の留意点・支援等

「学びと生活」の双方向性を大切にし、学んだ価値を「自分から人・社会等へ」と広げていくよう、学習の生活化を図った。

3 評価について

- 友達と意見を伝え合うことを通して、道徳的価値を多面的・多角的に捉えようとしている。（話し合いの様子、発言、表情）
- 周りの人のことを考えて行動することで、自分も周りの人も気持ちよく生活できることに気づき、きまりやマナーを守って生活することの大切さについて考えている。（ワークシート）

4 実践を振り返って

① 単元化を図ったことの成果

本実践は、年間指導計画を一部変更し、同じ内容項目に属する複数の教材を単元化して行った。それによって、「道徳的価値について“理解を深めること”と“多角的に捉えること”」ができるようにした。児童の様子についても、同じテーマについて続けて考えたことで、前の時間に気付いたことと何が違うのかを考えようとする雰囲気があり、価値理解の深まりにつながったと思われる。

② 実践の課題

今回の内容項目「規則の尊重」は、児童の生活に身近なものであり、教師としても生徒指導上気づきやすい点である。ただ、そうした時に、児童の行為への「指導」のみで終わってしまうことがあり、授業で得た「気づき」を思い出させることができないことが多い。「道徳科」を授業としてだけで終わらせず、道徳教育の要であることを意識して道徳教育を推進していきたい。

また、本実践は当初「地域道徳」を考えていた。子どもたちが生活する地域において、地域の方と共に行う「地域道徳」の展開は、子どもたちの学びや育ちの様子を知っているからこそ、子どもたちの心に響く言葉、多様な価値や多面的・多角的な視点の獲得につながっていくと思われるので、今後挑戦していきたい。

～友情、信頼～

防府市立向島小学校

1 本授業におけるポイント

- 板書を生かす工夫…心情の変化を対比的・構造的に示す工夫
- 発問の工夫…児童の思考に沿った発問

2 授業の実際

1 主題・教材名 ともだちっていいな 「ころはっば」 (東京書籍)

2 ねらい

友達と進んで関わり、仲良くしようとする心情を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 「友達ができたときのこと」を想起する。

教師：みんな、新しい友達ってどうやってできたのかな。
 児童A：自分から話しかけて、友達になった。
 児童B：いっしょに遊んでいて、仲良くなった。
 児童C：友達になろうって言った。
 児童D：一緒に話とかして仲良くなった。
 児童E：一緒に遊ぼうって言った。

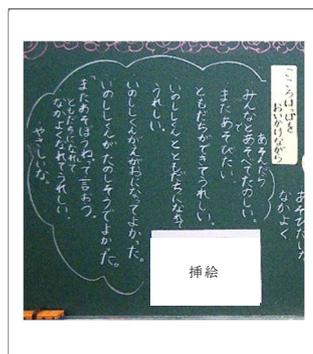


- 指導上の留意点・支援等

どのようにして友達ができたのかという生活体験を想起させ、学習への導入とする。

(2) 展開 「ころはっば」を読んで考える。

教師：飛んでいくはっばを追いかけながら、みんなはどんなことを思っていたのかな。
 児童A：みんなと遊べて楽しい。また遊びたいな。
 児童B：友達ができてうれしい。
 児童C：いのししくんと友達になれてうれしい。
 児童D：いのししくんが、笑顔になってよかった。いのししくんが楽しそうでよかった。
 児童E：「またあそぼうね。」って言おう。
 児童F：仲良くなれてうれしい。
 児童G：友達になれてうれしいな。やさしいな。



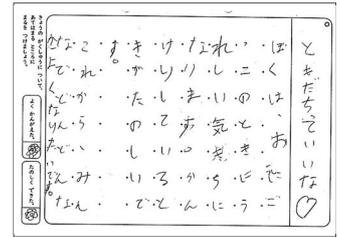
- 指導上の留意点・支援等

いのししくんの気持ちを考えやすくするために、無色のころはっばを用意し、色をつける活動を行う。また、はっばの色については、その色でいのししくんのどんな気持ちを表現したかったのかを問う。

悲しい気持ちのときと楽しい気持ちのときとで、ころはっばに色をつける活動を行い黒板に整理することで、心情の変化が視覚的にも捉えられるようにする。

(3) 終末 友達がいて良かったことやうれしかったことを振り返り、これから、どのようにすごしていきたいかについて考える。

教師：友達と遊んだり、話したりして、みんなのころはっばの色が変わったことってあるかな。良かったことや嬉しかったことあるかな。
 児童A：休み時間に友達と一緒に遊んでいるとき楽しい。
 児童B：「遊ぼう。」って言うってくれるとき、うれしい。
 児童C：転んだときに、友達に助けてもらったときうれしかった。
 教師：これから、どんなふうに友達と過ごしていきたいかな。
 児童A：これからもみんなで仲良くすごしていきたい。
 児童B：これからも友達と遊びたい。
 児童C：これからもみんなでどんどん仲良くなりたい。



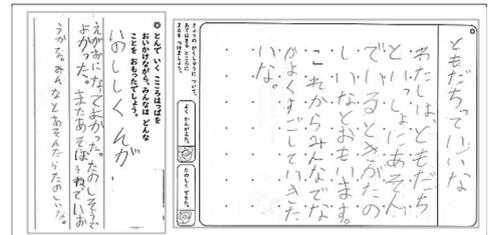
○ 指導上の留意点・支援等

生活体験の中での友達がいて良かったことや嬉しかったことを振り返ることで、「友達っていいな」という実感がもてるようにする。

「友達っていいな」と感じられるためには、仲良く過ごすことが大切だと言うことに気付けるようにする。

3 評価について

- 友達になれた4匹の気持ちを十分に考えているか、ワークシートや発言から見取る。
- 友達がいることの良さを実感し、友達と進んで関わって仲良くしていこうという気持ちをもてたかワークシートや発言から見取る。



4 実践を振り返って

白紙のころはっばに色をつけ、黒板に貼る活動を取り入れたことで、登場人物の気持ちを考えたり、心情の移り変わりを視覚的に捉えたりすることができた。また、自分のはっばをつくったことで、色を理由として、登場人物がどんな気持ちだったと思うか発言しやすくなり、児童全員が自分の考えを伝えることができた。

悲しい気持ちのときと楽しい気持ちのときとで、ころはっばに色をつける活動を行い、黒板に整理したことで、心情の変化が視覚的にも捉えやすくなった。また、心情の変化と結びつけて、友達の良さへと繋げることができた。

児童の意見に対して、「なんで?」「どうして?」と教師が問い返すことが多かったので、意見を言った後、必ず理由を付け加えて話す習慣をつけておくと良かった。

はじめの場面で、一人ぼっこのいのししくんの悲しみにもっと共感できるような声かけが必要だった。深い悲しみと友達ができた時の喜びの対比をもっと出せると良かった。



1 本授業におけるポイント

- 「きまりを守ることは大切か」「きまりを守らないとどうなるか」等の事前アンケートを実施し、考えと行動のズレを学級全体で共有することで、自分事として学習へ臨めるようにした。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 社会のきまり 「日曜日のバーベキュー」 (東京書籍)

- 2 ねらい

川原にごみを捨てようか、持ち帰ろうか葛藤している「ぼく」の気持ちを考えることをとおして、約束やきまりを進んで守っていこうとする態度を養う。

- 3 学習指導過程

(1) 導入 本時のねらいとする道徳的価値について問題意識をもつ。

教師：「きまりを守ることは大切だと思いますか。」
 児童A：とても大切だと思う。
 児童B：きまりを守らないとけがをするから。
 児童C：きまりを守れなかったこともある。
 児童D：時間を守れなかったことがある。

- 指導上の留意点・支援等

事前にとったアンケートの結果を示すことで、児童がこれまでの経験を基に、きまりを守ることにについて考えられるようにする。

(2) 展開 教材文を読み、話し合う。

教師：「自転車のごみを片付けているときのぼくはどんな気持ちだろうか。」
 児童A：腹が立つ。
 児童B：許せない。
 教師：「またお母さんの自転車のかごにごみがあったのを見つけてぼくはどんなことを考えたでしょうか。」
 児童C：自分も同じようなことをしてしまっている。
 児童D：今からでも片付けにいきたい。

- 指導上の留意点・支援等

自転車のかごにごみが入っていたことと川原にごみを置いてきたことを重ね、「ぼく」の後悔する気持ちに共感させる。

イライラ度メーターで、児童のイライラ度を視覚的に分かりやすくする。きまりを知らながらごみをそのまま捨ててしまった主人公の心の葛藤を、自分ごととして捉えさせる。イライラ度メーターを使って、最初との気持ちの変化を視覚的に分かりやすくする。

(3) 終末 学習を振り返り、考えたことを伝え合う。

教師：「きまりを守ることにについて今までの自分はどうでしたか。」
児童A：川原にゴミを捨てたことを思い出した「ぼく」は「ああ、やめておいたほうがよかったかもな。」と思ったところで、自分も似たような経験があった。これからは、そうしたことがないように気を付けていきたい。
児童B：今までの自分は「きまりだけど、ちょっとくらいは。」と考えることがあったけれど、今日の学習でやっぱりまわりの人にも迷惑がかかってしまうから、きまりを守るようにしたい。

○ 指導上の留意点・支援等

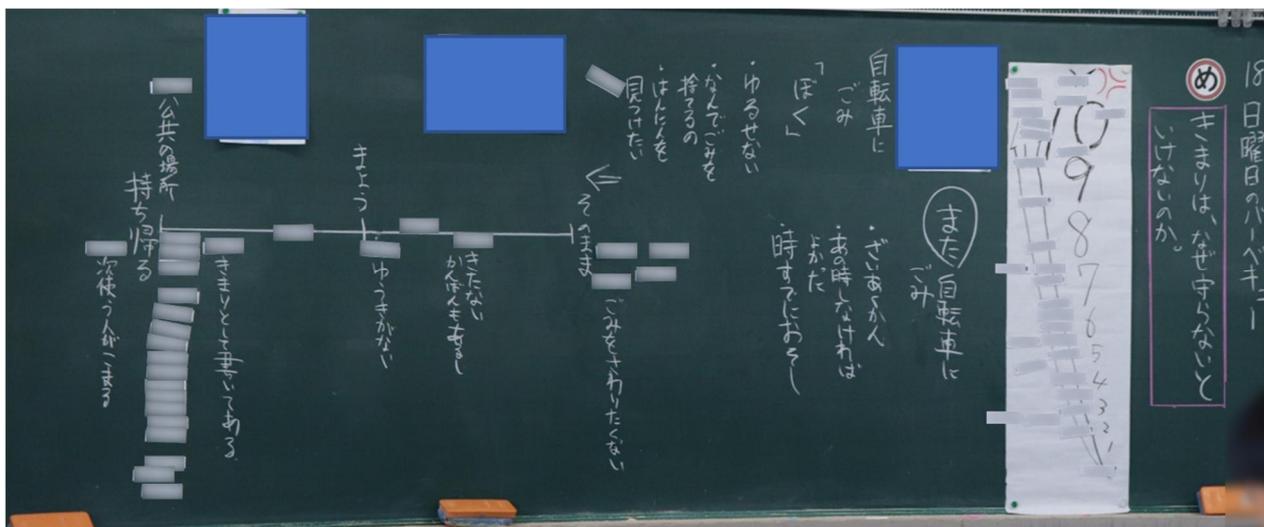
本時の学習内容と自分の経験とをつなぎながら振り返らせることで、本時で学んだ道徳的価値の理解を深める。

3 評価について

○ きまりを守ることの難しさと、それでも守る必要があることを理解し、きまりを守ることについて考えを深めている。（ワークシート、発言）

4 実践を振り返って（成果や課題等を書く）

- ・こちらの発問や投げかけに対して、事前に想定しているよりも多種多様な意見が出された。それぞれ児童の生の声、思いが表出されていた。こちらが事前に「このような意見が出るであろう。」と予想しておくとともに、予想していないような発言に対しても、ねらいに沿ってその場で問い返したり、全体に投げ返したりすることで学びを深めることができるとよかった。
- ・子どもの声を一つ一つ大切に聞くようにし、全体に投げかけることで学級全体の深まりへとつながっていった。
- ・今回初めて使用したイライラメーターは、それぞれの児童が感じている怒りなどのマイナスな思いが視覚的に確認し、共有することができる点ではよかった。一方で、場面ごとでのイライラの変化が分かりにくい点は改善の余地があった。また、今回のめあてとメーターが直結していないようにも感じ取れたので、心情曲線のように補助的に用いることができれば、今後よりよい学びになると考えられる。



～正直、誠実～

美祢市立大嶺小学校

1 本授業におけるポイント

- 役割演技等の疑似体験的な活動を行うことを通して、「嘘をついた時」と「正直だった時」の気持ちを比較し、正直で過ごすことのよさを見いだすことができるようにする。
- 登場人物の気持ちを考えることを通して、正直で過ごすことのよさについて気付き、相手の立場に立って物事を考えることができるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 あかるい心で 「さるへいと立てふだ」（東京書籍）

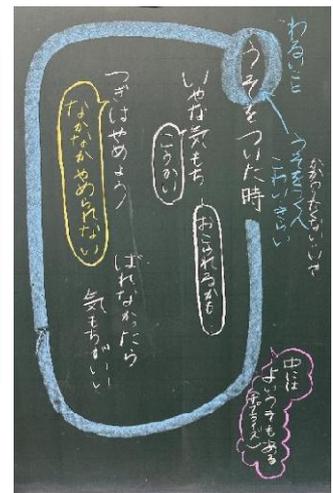
2 ねらい

嘘をついた時の気持ちと正直に伝えた時の気持ちを比較し、その変化の理由について話し合うことを通して、嘘をつかず、正直で素直に生活しようとする態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 嘘をついてしまった時の気持ちを交流する。

教師：嘘をついてしまった時、どのような気持ちだったかな。
 児童A：嘘がばれて怒られたらどうしようと思うから、いやな気持ちになるよ。
 児童B：次はやめようと思うけれど、なかなかやめられないよ。
 児童C：よい嘘もあるけれど、悪い嘘だったら後悔するよ。
 教師：もし悪い嘘をつく友達がいたら、どう思うかな。
 児童D：その人とは、関わりたくないね。
 児童E：一緒に遊ぶのは、ちょっと嫌だな。
 教師：どうして嘘をついてしまうのかな。
 児童A：よく分からないな。



○ 指導上の留意点・支援等

児童は、「嘘をついてはいけない」ことについて、これまでの生活経験から十分理解しているが、なぜ嘘をついてしまうのかという人間理解までは到達していない様子であった。そこで、なかなか実現できない人間の弱さについて捉えることができるようにしたいと考え、導入と終末で「どうして嘘をついてしまうのか」と問うようにした。

(2) 展開 さるへいが変わった理由について考え、話し合う。

教師：どうして、さるへいは変わったのかな？
 児童A：もう嘘をついてもだめだと思って、仕方がなく正直に伝えたよ。
 児童B：勝手に看板に書かないで！と思っていたけれど、他のさるたちに会うと、看板が正しくて、自分が間違っていたと気付いたのではないかな。
 児童C：嘘をついた時は気持ちがよかったけれど、嘘をついて人に会うと気持ちよくないと気付いたからだと思うよ。
 児童D：正しい方を見習って、柿を分けてあげたら、気持ちがよかったのだろうね。
 児童E：正しいことをしたら、友達が増えると気づいたからだよ。

○ 指導上の留意点・支援等

立て札に嘘を書いた時の気持ちと正しいことを書かれた時の気持ちを考えるために役割演技を行ったり、表情を想像して表現したりすることを通して、考えを深めていった。その際、「さるへいは、お話の最後までずっと悪い顔をしていたのかな？」と尋ねると、「最後は、にこっと笑顔になったのだよ」と表情を付けて発言する児童がいた。そこで、中心発問となる「どうして、さるへいは変わったのだろうか？」と尋ね、嘘をついた時よりも正直に伝えた時の方が気持ちがよいことや、正直に過ごすことのよさについて考えを深めていった。

(3) 終末 「どうして嘘をついてしまうのか」について考え、話し合う。

教師：どうして嘘をついてしまうのかな。

児童A：嘘はいけないと分かっているけど、嘘に慣れてしまっているから、急に嘘をやめることはできないから、つい嘘をついてしまうのだと思うよ。

児童B：嘘をついて、自分を守ろうとしてしまうからだと思ったよ。だけど、正直に過ごしたほうが、友達が増えたり、やさしくなったりするよいことばかりだなと分かったよ。

児童C：嘘をつかずに正直に過ごすと、難しいね。正直の方が気持ちよく過ごせるから、頑張ってみたいな。

○ 指導上の留意点・支援等

再度、「どうして嘘をついてしまうのか」と問い、教材の登場人物とこれまでの自分とを重ね合わせて考えるよう促した。そうすることで、導入時は「よく分からない」と答えた児童が、嘘をついてしまう時の人間の弱さや正直で過ごすことのよさについて見いだすことができた。その後、「正直に過ごしていくために、大切にしたい思いや考えはなにか」について、振り返った。

3 評価について

○ さるへいが変わった理由について、多面的・多角的に考え、自分の考えをまとめたり、友達に伝えたりしているか見取る。(ノート・発言)

○ 学習を振り返り、正直に過ごしていくために大切にしたい思いや考えについて、自分の言葉で表現しているか見取る。(ノート)

4 実践を振り返って

役割演技や登場人物の表情を想像する活動を通して、児童が教材の登場人物に自己投影し、「なぜ嘘をついてしまうのか」という人間の弱さに気付くことができた。低学年の児童にとって、自分の行動や感情を言葉で表現することは難しい場合があるが、役割演技を取り入れることで、言葉に頼らずに人間の弱さを表現する姿が見られた。その結果、振り返りでは「嘘をつくとその時だけ楽しいけれど、正直だとずっと楽しいが続くことがわかった」と記述する児童もいた。分かってはいても実践が難しい「正直に過ごすこと」について、自分も正直に生きていきたいという意識を高めることができたと感じている。

～希望と勇気、克己と強い意志～

美祢市立伊佐中学校

1 本授業におけるポイント

- グループでの話合いの場面を設け、教師が問い返しをすることで、「苦しみの中から星野さんを前進させたもの」を生徒が多面的・多角的に考えられるようにする。

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 苦しみの中から前に進む勇気をもつために
「詩画にあしたをたくして一星野富弘」（東京書籍）

2 ねらい

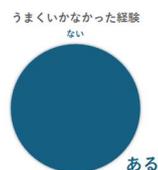
絶望の中にあっても希望と目標をもって前に進んでいこうとする星野富弘さんの姿を通して、自分自身の弱さに向き合い、強い意志をもって生きていこうとする実践意欲と態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 事前アンケートの結果を知る、星野さんの作品「なのはな」を見る。

教師：事前アンケートの結果を提示する。
星野さんの作品「なのはな」を提示する。
「どんな印象をもちましたか。」
生徒A：こまかいところまで描かれている。
生徒B：きれい。

3 今までに、努力しているけれど、うまくいかなかった経験がありますか？



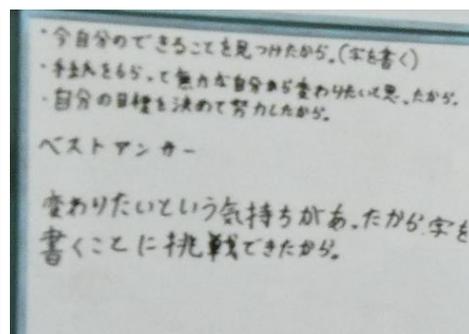
〈生徒事前アンケートより〉

○ 指導上の留意点・支援等

困難にどう向き合うかについて、自分にひきつけて考えられるように事前にアンケートを実施し、提示した。その後「なのはな」を提示し、その印象を尋ね、星野さんの紹介へとつなげた。

(2) 展開 事故で首から下が動かない状態になった星野さんの苦しみを踏まえ、星野さんが苦しい状況を克服していった原動力について考え、話し合う。

教師：「どうして星野さんは、苦しみの中から少しずつ前に進むことができたのだろう。」
生徒A：手紙をもらったことがうれしくて、恩返しをしたかったから。
生徒B：文字を書いてみて「あきらめたくない」という思いが強くなっていったから。
生徒C：できることが限られていても、その中でできることを見つけて実行することができたから。
生徒D：手紙でまわりに伝えたいことを伝えることができたので、心に余裕が生まれ、前に進む勇気や希望をもつことができたから。



○ 指導上の留意点・支援等

生徒たちは個人で考えた後、3人グループになり、自分たちのベストアンサーを話し合っただけで決めた。その後、全体で各グループのベストアンサーと理由を発表した。生徒たちの意見を「星野さんの強い意志」と「支えてくれた人への恩返し」に分類した。

(3) 終末 事前アンケートの結果を再度提示し、「困難や失敗があっても努力し続けるために」というタイトルで本時の振り返りを書く。

教師：「困難や失敗があっても努力し続けるためには、どのようなことが必要だろう。」

生徒A：失敗とかがあっても、今の自分ができることを何回も続けることが大切だと思った。

生徒B：失敗があっても改善点を見つけて、どうすればよくなるかを考えることが大切だと思った。

生徒C：失敗や困難は小さいものも大きいものもあるが、あきらめずに努力することが大事だと思った。

努力しているけれど、うまくいかなかったときは…

・ポジティブに、次はどうすればうまくいくかを考える

・改善点をさがす

・一度離れて、やりたくなったらまた始める

・できるまで努力する

〈生徒事前アンケートより〉

○ 指導上の留意点・支援等

事前アンケートを再度提示したことにより、本時の学習内容をふまえ、今までの自分を振り返られるようにした。

3 評価について

- 星野さんが苦しい状況を克服していった原動力についての考えを、話し合い活動の様子やワークシートの記述から見取る。

3 〈振り返り〉「困難や失敗があっても努力し続けるために、」

失敗とかがあっても、今の自分ができることを何回も続けることが大切だと思った。星野さんのように、不可能に近いこともできると希望を持ちたいなと思った。

4 実践を振り返って

事前アンケートを行ったことで、困難や失敗があっても努力し続けるにはどうすればよいかを生徒は自分事として考えることができた。また、展開では生徒が中心発問に対して多様な意見を出し、グループで活発に話し合うことができた。

その一方で、生徒が議論するためには時間が必要であり、本実践では話し合いの時間をどう確保するかが課題であった。議論するための時間を確保するためには、導入で星野さんの歩み、どのように絵や文字を描くかを説明し、星野さんがおかれた苦しい状況を理解させる必要があった。さらに展開での生徒の多様な意見を「強い意志」と「支えてくれた人への恩返し」に分類したが、「なぜ人間は強い意志をもてるのか」と問い返し、「できない自分から変わりたい」「もう一度、絵や文字を書けるようになった喜び」といった生徒から出された意見を「変容する喜び」や「だれかの役に立っている喜び」として分類して、示すことができるとよかった。今後は、議論するための時間の確保、発問や問い返しの質の向上が課題である。

1 本授業におけるポイント

- 「問題解決的な学習」として、教材の登場人物を通して、「本当の自由」と、「わがまま勝手」の違いを考え、意見を交換させる。
- 「板書を生かす工夫」として、ワークシートと連動させながら、違いを対比的に示して、話合いの論点を明確にする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 自由とは「うばわれた自由」（日本文教出版）

2 ねらい

「わがまま勝手」は、自分のわがままな心に振り回され、自由とは違うことや、自由だからこそ自分に責任が伴うことを理解し、自分でよく考え責任ある行動をとろうとするための判断力を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 「自由」とはどのようなことなのか、自分の考えをもつ。

教 師：「自由ってどういうことですか」
 児童A：自分の思い通り、何でも好きなようにできること。
 児童B：やりたい放題、好き勝手できる。
 児童C：自分のやりたいことをする。
 児童D：やりたい放題、好き勝手とは違う。

○ 指導上の留意点・支援等

自由の価値を、自分の言葉で表現することが難しい児童には、日常生活の中で、自由に行動したときの経験を想起させる。

(2) 展開 「わがまま勝手」と「本当の自由」との違いについて話し合う。

教 師：ガリユートの自由とジェラル王子の自由の違いは？
 児童A：ジェラル王子は、やりたい放題の好き勝手。ガリユートの「自由」は、人に迷惑をかけないようにきまりを守った上で、自分のしたいことをする「本当の自由」。
 児童B：ジェラル王は、自分は王だからと言って、ルールを守らず、自分に都合よく、「わがまま勝手」にふるまった。
 教 師：裏切りにあい、牢屋に入れられ、自由を奪われたジェラル王は、ガリユートと再会したとき、どんなことを語ったでしょうか。
 児童A：ガリユートに言われたことを素直に聞いていけば、国が乱れずにすんだのに…。
 児童B：王だからと許されると思って、「わがまま勝手」をしてきたことを反省した。
 児童C：王としての責任感がなく、「わがまま勝手」をしていたこと後悔した。
 児童D：自由の意味を間違えていた。「本当の自由」が何か分かっていなかった。
 教 師：「わがまま勝手」と「本当の自由」の違いは何でしょう？
 児童A：「わがまま勝手」は、人のことは考えず、自分勝手に好き放題すること。
 児童B：「本当の自由」は、ルールを守り、人の迷惑にならない。
 児童C：「本当の自由」には、自分の行動に責任が必要。

○ 指導上の留意点・支援等

登場人物の自由観を比較しながら、「わがまま勝手」と「本当の自由」の違いを考えさせる。その際、「わがまま勝手」な行動を続けたせいで世の中が乱れ、裏切りにより投獄されたジェラル王の心情を考えることで、「本当の自由」とは、自律的な自由であり、責任が伴うものであると気付かせる。

(3) 終末 今日の学習を振り返り、これからの自分に考える。

教師：「本当の自由」とはどういうことでしょうか？自分の生活で、これから大切にしたいことをまとめよう。
 児童A：「本当の自由」は、楽しくて素晴らしいことだから、周りの人のことも考えて行動する「本当の自由」を大切にしたい。
 児童B：自分のしようとするのが「本当の自由」なのか、よく考えて行動したい。
 児童C：「本当の自由」には、自分の行動に責任が必要だと分かったから、これからは、人に迷惑をかけないようにして、自分の行動に責任をもつことを心がけたい。

○ 指導上の留意点・支援等

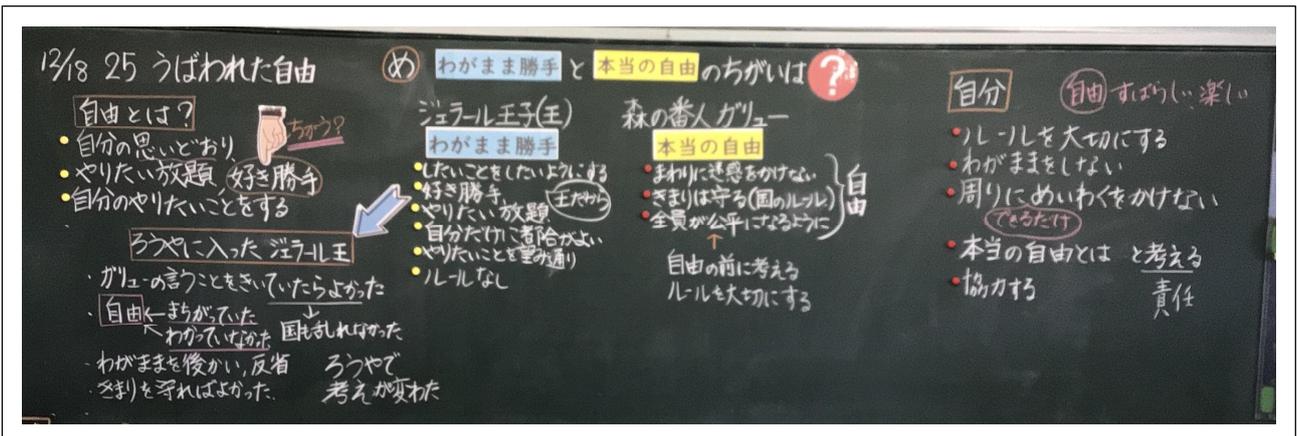
自分の生活に結び付けながら「本当の自由」のために大切にしたいこと、心がけていきたいことを書く。自分の思いや考えを自分の言葉で発言できるように、発言する時間を設定する。

3 評価について

○ジェラル王の心情を考えることを通して、自由について考えているか。（見取り、ワークシート、発言）
 ○「自由」とは、「自律的」な自由であり、責任が伴うものであることについて考えているか。（見取り、ワークシート、発言）

4 実践を振り返って

毎回、まず教材文の内容を理解することが課題になる。特に、外国の話になると、登場人物の関係や思い、言動の理由をとらえることが困難となる子が少なくない。そこで、今回は、登場人物の自由観を比較しながら思考できるようなワークシートを用いた。板書でも比較できるように示した。学習の最後には、自由とは、「好き勝手できる気楽な行動ではない」、「ルールの中での自由」、「自分をコントロールする必要」、「責任を伴う」などと、自分の言葉で発言し、学級で共有することができた。



1 本授業におけるポイント

- 自分の身を守るためには、危険なことを予想したり、これまでの学習や心配してくれる人のことを考えたりして、自分で考えることが大切である。そのために、役割演技等の疑似体験的な表現活動を取り入れ、自分事として捉えられるようにする。
- 服装や態度、言葉遣いなどだけで人を判断するのは危険であり、日々の安全指導や家庭で言われていることなどを思い出し考えることができるように、「やさしそうだから大丈夫」「きちんとしているから大丈夫」など揺さぶりをかけ、考えることを促す発問の工夫を行う。

2 授業の実際

1 主題・教材名 あんぜんにくらすために 「あぶないよ」 (日本文教出版)

2 ねらい

自分の身を守るためには、危険なことを予想したり、これまでの学習や心配してくれる人のことを考えたりして、自分で考えることが大切であることに気付き、安全に生活しようとする態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 登下校で怖い思いをしたことがないか思い出す。

| |
|---|
| 教師：学校の行き帰りで「こわいな」と思ったことはありますか。 児童A：車にぶつかりそうになった。 児童B：道の真ん中を歩いている人がいた。 児童C：知らない人に話しかけられた。 |
|---|

○ 指導上の留意点・支援等

- ・登下校時の様々な場面を想起させ、安全に対する価値の方向づけをする。
- ・日常生活で起こる危険なことへどう対応するのか、自分の身を守るための問題意識をもたせる。

(2) 展開 「でもなあ」と、ぼくがどうして迷っているかを考える。

| |
|--|
| 教師：「でもなあ…」というぼくはどうして迷っているのかな。 児童A：やさしそうに見えるから教えてあげようかな。 児童B：たすけてあげたいな。 児童C：どうしたらいいかな、助けてあげた方がいいかな。 児童D：ついてって教えてあげようかな。 |
|--|

○ 指導上の留意点・支援等

- ・登場人物や場面の状況を押さえながら、優しくそうな男の人が困っている様子と「ぼく」がお母さんに言われていることを対比させつつ、「ぼく」の困り感を捉えさせる。

展開 優しいような男の人だから車に乗っても大丈夫じゃないかとゆさぶり、考えさせる。

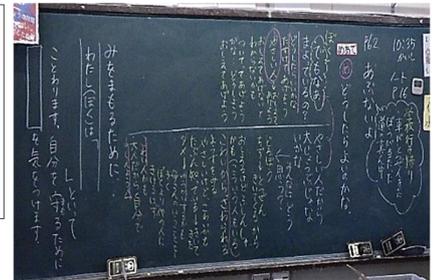
教師：この男の人は優しいのだし、言葉遣いも服装もきちんとしているから、大丈夫じゃないかな。
 児童A：教えるけど、不審者かもしれない。
 児童B：なんだか怖い。さらわれるかも。
 児童C：実は怖い人かも。
 児童D：道はたぶん知ってるかも。だって大人なのに何で子どもに聞くのかな。

○ 指導上の留意点・支援等

- ・考えをより深めるために、ゆさぶりの質問をしたり、演じさせたりする場面を取り入れる。
- ・人は見かけによらないこと、簡単に人を信じることは危険につながる場合があることに気付かせる。

(3) 終末 自分の身を守るためには、どんなことを考えることが大切か考える。

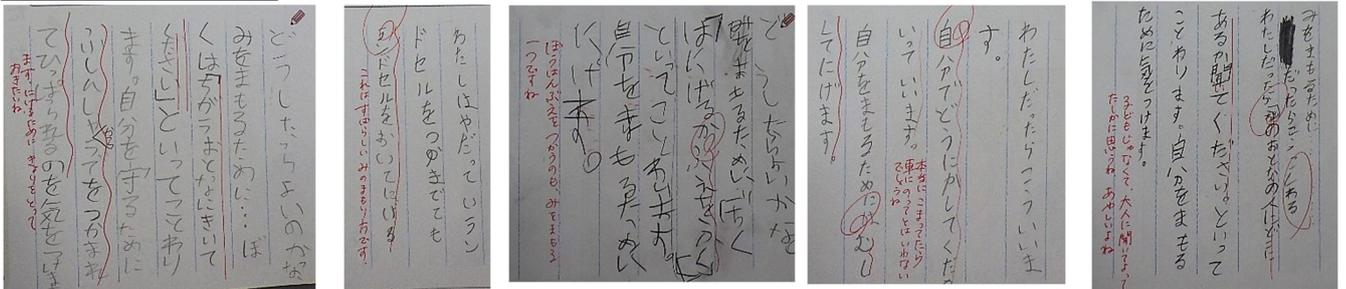
教師：自分の身を守るためにはどんなことを考えることが大切か考える。
 児童A：「大人の人に聞いてください」とはっきり断る。
 児童B：引っ張られたら、ランドセルを置いて逃げる。
 児童C：いかのおすしを気を付ける。
 児童D：「下校中なので…」と断る。



○ 指導上の留意点・支援等

- ・登場人物の「ぼく」に自分を投影させながら、どのような行動に出ることが求められるか、また超えてはいけない一線は何かを見極めることを考えさせる。
- ・文章の型を示し、自分が考える視点を明確にする。

3 評価について



4 実践を振り返って

危険から身を守るためには、どんなことを考えて行動することが大切か自分との関わりで考えられるように、役割演技をしたりゆさぶり発問をしたりし、安全に生活することについて考えを深められた。また、振り返りの文章の型を示すことで、なかなか表現ができない子も思いを書くことができた。

課題として家族や周りの人々が支えてくれているからこそ、安全に生活ができていることにも気づかせることができればよかったと感じている。

～親切、思いやり～

阿武町立福賀小学校

1 本授業におけるポイント

- 生活科でお世話になった地域の方々と役割演技を行ったり、行動の思いを話し合ったりすることで、親切のよさについて体験と結び付けて考えられるようにする。

2 授業の実際

1 主題・教材名 親切にすると 「はしのうえのおおかみ」（日本文教出版）

2 ねらい

親切にすること・されることの心地よさや親切がつながることに気付き、身近な人に親切にしようとする態度を育てる。

3 学習指導過程

(1) 導入 今の「親切」観について発表する。

教師：「親切にする」ってよいこと
 児童A：よいこと。
 教師：「親切にする」ってどういうこと
 児童B：やさしくすること？
 教師：「親切にする」とどんなよいことがある？
 児童C：・・・？

- 指導上の留意点・支援等

親切はよいことだという考えはあるが、どうすることが親切なのか、親切のよさは何なのか、曖昧であることを確認し、「教材のおおかみは親切か」という課題意識をもたせて教材を範読する。

(2) 展開 教材を読み、おおかみの心情の変化と理由について地域の方々と話し合う。

教師：うさぎに意地悪した時よりくまさんに親切にした後の方が「ずっといい気持ちだった」のはなぜだろう。
 児童A：うさぎさんによるこんでもらえたから。
 児童B：くまさんに親切にしてもらってうれしかった。
 児童C：初めは、自分は強いと思っていばってたけど、最後は、反省して優しくできたから。
 児童A：怖いと思ったくまさんがやさしくてうれしかった。今度自分もしようと思った。
 児童C：自分より大きいからやさしくするじゃなくて、誰にもやさしくできてうれしかった。
 児童B：くまさんに会ってあんな親切の仕方があると分かってうれしかった。

- 指導上の留意点・支援等

- ・ 意地悪をした場面、くまに譲った場面、抱き抱えた場面それぞれを「親切」かどうか判断することで、親切が誰のための行動になっているか考えさせる。
- ・ 「えへんえへん」と言った始めと後の場面での心情の違いとそのきっかけを地域の方とグループで話し合う。親切にするよさを言語化できるようにする。
- ・ 「親切はよいこと」という導入での意見と意地悪だった初めのおおかみの場面

を対比することで、よいことと分かっていても、親切を行うことは難しいことをおさえ、くまの存在の大きさに気付かせる。

- ・ くまに出会う場面では役割演技をする。くまの役を地域の方にさせていただくことで、親切にされたおおかみの心地よさを実感できるようにする。その上で、「親切に出会って・・・」という書き出しで変化を話し合ってみる。

(3) 終末 親切のよさとこれからできそうな親切を考える。

教師：「親切は・・・」で親切のよさをまとめよう。これからどんな親切ができそうかな。
児童A：親切は、うれしくなること。
児童B：やさしくしたい。
児童C：誰とか関係なく親切にしたい。

○ 指導上の留意点・支援等

導入と同じ問いかけを再び行い、親切についての考えの深まりを視覚化する。生活科での地域の方との交流の画像やインタビューの様子を「親切」の視点で視聴し、地域の方々の心情や行動の意味を考える。また、自分の生活の中で親切にされた経験や心地よさを想起することにもつなげる。

3 評価について

- 話し合いや役割演技を通して、親切にされることやすることのよさについて多面的・多角的に考えようとしていたか。（ノート・発言）

4 実践を振り返って

生活科の学習で何度もお世話になっている地域の方々と、話し合いや役割演技を共に行いながら親切のよさについて考える学習を行った。

【成果】

- ・ 極少数人数であるので、今夏の学習スタイルは多様な価値観に触れる機会となった。また、地域の方々が思いを受け止め、引き出すように話を聞いてくださったことで子どもたちは、思いを言葉にしやすくなった。
- ・ これまでの地域の方々の親切な言動と、役割演技での親切な言動が重なって、親切にされることの心地よさを実感できた。また、「相手（自分たち）のための親切」の元になる心と行動のよさに触れることもできた。

【課題と今後】

- ・ 授業に参加される方が気軽に参加できるよう、今後呼びかけの仕方や授業スタイルについて計画していきたい。
- ・ 発達段階として他者の心情を深く理解することは難しいため、役割演技や書き出しの言葉、視覚化を意識して授業を行った。しかし、子どもが答えにくい場面が多くあった。多様な表現方法を示せるようにしたい。また、生活・学習経験と授業とのつながりをもっと強く意識することが必要であると感じた。焦点化したねらい・発問だけでなく、資料や掲示物・生活場面での声掛けなどを工夫し、自分のこととして考えを深める態度を育てていきたい。

～よりよく生きる喜び～

阿武町立阿武中学校

1 本授業におけるポイント

- 主人公「僕」が場面ごとにどのような気持ちになったのかを時系列で整理した上で、「僕」が最終的にどう考えて行動したのかは生徒に伏せた状態で、「『僕』はその後どうしたら自分らしくいられると思いますか。」と問う。

【課題解決的な学習】

- 「心の弱さを乗り越えようとする気持ち」はなぜ生まれたのか、そしてどう行動できたのか、生徒に自分事としてしっかり考えさせる。

【発問のタイミングと発問方法の工夫】

2 授業の実際

- 1 主題・教材名 両親の声「銀色のシャープペンシル」（あかつき教育図書）
- 2 ねらい

本当のことを言い出すことができず葛藤する「僕」の心の動きについて考えることを通して、自己の弱さや醜さと向き合い、それらに打ち勝つ良心の声があることに気付き、よりよく生きる喜びを見出そうとする道徳的实践意欲を培う。

3 学習指導過程

(1) 導入 過去の経験を振り返らせる。

教師：自分の失敗を素直に謝れなかった経験はありますか。
 生徒A：ある。弟とのけんか。
 生徒B：ある。友達に嘘をついた。

- 指導上の留意点・支援等

過去に、素直に謝ることができなかった経験がある生徒全員にそれがどのようなことかを発表させることを通して、本時のテーマに関する「心の弱さ・醜さ」について自分なりに目を向けさせたいうえで教材に入るようにするとともに、議論しやすい雰囲気醸成する。

(2) 展開前半 途中まで範読し、「僕」の心の葛藤を場面ごとに感じ取らせる。

教師：「僕」はこの後、どうしたら自分らしくいられると思いますか。
 生徒A：「卓也」に本当のことを話し、謝る。
 生徒B：「卓也」にきちんと謝り、許してもらう。

- 指導上の留意点・支援等

登場人物および場面ごとの「僕」の心情について板書を用いて視覚的に捉えやすくする。

(3) 展開後半 最後まで範読し、「僕」が「心の弱さ」を乗り越えたきっかけを考えさせる。

教師：「僕」の気持ちが変わったのはどうしてだと思いますか。
 生徒A：このままの自分ではいたくない。
 生徒B：自分のずるさが許せない。
 生徒C：「卓也」のように正直でいたい。
 生徒D：「卓也」と今までのような関係でいたい。

「僕」はどうして正直に言い出せなかったのだろうか。理科の時間、授業後、卓也からの電話、それぞれの場面を考えてみよう。

| | | |
|---|--|---|
| 【理科の時間】 ・健二が「泣」たと言ったから、 ・なぜ今さらなのか ・なんで急にこんな声で... | 【授業後】 ・二人の前で買ったときから、 ・健二のせい ・うそをいいた | 【卓也からの電話】 ・卓也から「謝りなさい」 ・情けない ・自分が謝るべきなのに |
|---|--|---|

○ 指導上の留意点・支援等

「卓也」の心の強さに「僕」が気付いた点を生徒に気付かせる。その中で、「卓也」の素直な心にふれたことで、「僕」が自分自身を見つめ直していく心の動きを捉えさせる。

(4) 終末 本時のねらいに迫る。

教師：自分の心の弱さに気付いたとき、あなたならどうしますか。
 生徒A：どうしたら自分らしくいられるか、一人になってじっくり考える。
 生徒B：家族や友だちに相談する。
 生徒C：先生に間に入ってもらって謝る機会をつくってもらおう。
 生徒D：自分なら素直に謝ると思うし、いつもそうでありたいと思う。

○ 指導上の留意点・支援等

まず個人で考えさせ、ワークシートに記載させた後に、4、5人のグループで対話させる。最後に、グループごとに発表させる。

3 評価について

- 「卓也」の家の方向にゆっくりと向きを変えた「僕」の心情を様々な視点から捉え、自己の弱さや醜さに打ち勝つ良心の声について考えを深めている様子が授業中の交流からうかがわれるか。
- 「僕」の心情を自分に置き換えて想像し、自己の弱さや醜さと向き合い向き合い、それらに打ち勝つことについて自己との関わりで考えを深めている発言やワークシートへの記述が見られるか。

4 実践を振り返って

嘘をつくことはよいことではない、素直に謝ることは大切なことだということを生徒はきちんと理解しているが、失敗したときや自身が不利になる場面で、咄嗟に嘘をついてしまうことは現発達の段階の生徒にとって珍しいことではない。

いかなるときにも、素直に失敗を認めることや謝ることは、大人にとってもそれほどまでに難しいことである。

人は自分の心の弱さを認め、それを乗り越えることでよりよく生きる喜びを感じる。このことを、「『僕』はその後どうしたら自分らしくいられると思いますか。」という発問のタイミングと工夫で生徒に問いかけることにより、より深くかつ効果的に感じさせることができた。

| | |
|--|---|
| 僕は、言い出しにくくて、言っていなかったけど、最後の卓也の電話から卓也の家にに行くのは勇気が必要だったと思います。今回の授業で、「言いだす勇気」「謝る勇気」2つの勇気を学びました。物を盗る以外にも、自分から謝らないといけない事はあると思います。自分から言うことを大切にしたいです。 | 涙を流して、たもちは正直に謝まることか大切だと思いましたが、自分の中の良心が悔い、是非をくり返す可能性があるので、謝まらうと思えました。謝まらなくて後悔はしたくないので、誠実さを持とうと思えます。そして、謝まる勇気も大切にしたいです。 |
|--|---|